

長野県松本市

IDEGAWANISHI

出川西遺跡 VI

— 緊急発掘調査報告書 —

1999. 3

松本市教育委員会

長野県松本市

IDEGAWANISHI

出川西遺跡 VI

— 緊急発掘調査報告書 —

1999. 3

松本市教育委員会

序

出川西遺跡は松本市のほぼ中央、南松本駅から国道19号線にかけて位置する広範な遺跡です。今回の調査地点は平成5年度に一度出川遺跡として発掘調査が行われ、古墳時代の遺跡と確認された場所です。

このたび当地に南松本ショッピングプラザの建設事業が計画されたため、松本市が(株)イトーヨーカ堂・松電商事(株)から発掘調査の委託を受け、埋蔵文化財の保護を図るため緊急発掘調査を実施することになりました。

発掘調査は松本市の委託を受けた(財)松本市教育文化振興財団によって組織された調査団により、平成8年9月から11月にかけて行われました。作業は天候にも恵まれ、参加者の皆様のご尽力により無事終了することができました。その結果、古墳時代中期の生活の跡を発見し、貴重な遺物も多数得ることができました。これらは、今後地域の歴史解明に大変役立つ資料になることとされます。

しかしながら開発事業に先立って行われる発掘調査は、記録保存という遺跡の破壊を前提とする側面があることも事実です。開発により私たちの生活が豊かになる一方、それにともない歴史遺産が失われてしまうことは残念なことです。発掘調査により当時の生活が明らかとなり、私たちの郷土松本が歩んできた歴史が一つずつでも解き明かされることは大変貴重なことだと考えます。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただいた参加者の皆様、また調査の実施に際して、多大なご理解とご協力をいただいた(株)イトーヨーカ堂・松電商事(株)の皆様、そして地元関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成11年3月

松本市教育委員会 教育長 竹淵 公章

例 言

1. 本書は、平成8年9月9日～11月14日に実施された松本市双葉・高宮中に所在する出川西遺跡（調査名：出川西VI）の緊急発掘調査報告書であるが、これより先行して平成5年度に行われた未報告の調査（調査名：出川Ⅲ）についても、調査地点が重複し内容的に不可分な関係にあるため併せて調査成果を収録した。
2. 本調査は南松本ショッピングプラザ建設にともなう緊急発掘調査であり、株式会社イトーヨーカ堂・松電商事株式会社より松本市が委託を受け、松本市から再委託を受けた（財）松本市教育文化振興財団・松本市立考古博物館が発掘調査を実施、本書の作成は平成9・10年度に松本市教育委員会が行った。なお業務委託及び財団法人への再委託にかかる事務処理は松本市教育委員会が行った。
3. 本書の執筆はⅠ：事務局、Ⅲ-2-(1)・付編2-(1)：直井雅尚、付編2-(2)：太田圭郁、その他を竹原 学が行った。
4. 現場調査から本書作成にあたっての記録・遺物整理・報告書作成の作業分担は以下のとおりである。

遺物洗浄 百瀬二三子

遺物保存処理・注記・復原 五十嵐周子、内沢紀代子、内田和子、洞沢文江

遺構測量 荒井留美子、上條尚美、小松正子、堤 加代子、中村恵子、村山牧枝

遺物実測 竹平悦子、洞沢文江、松尾明恵、村松恵美子、横山真理

遺構図整理 石合英子

トレース 内田和子、開嶋八重子、洞沢文江、松尾明恵

版 組 み 太田圭郁、石合英子、林 和子、百瀬秀俊

写真撮影 神田訓安・長畦和正・村田昇司（遺構写真）、横山和明（遺物写真）、エアータック（航空写真）

総括・編集 竹原 学

5. 図中で用いた方位記号はすべて真北方向を指している。
6. 遺構図中の土層名は記号化している。各記号の説明は以下のとおりである。

表記法 土色（混入物・量） 混入物量 a 少量 b 中量 c 多量

土 色

1 褐色	6 黄褐色	11 暗灰色	16 黄色	21 砂
2 暗褐色	7 茶褐色	12 黒灰色	17 暗黄褐色	22 砂 礫
3 黒褐色	8 灰褐色	13 赤灰色	18 暗茶褐色	23 緑灰色
4 明褐色	9 橙褐色	14 黄灰色	19 黒 色	
5 赤褐色	10 灰 色	15 青灰色	20 焼 土	

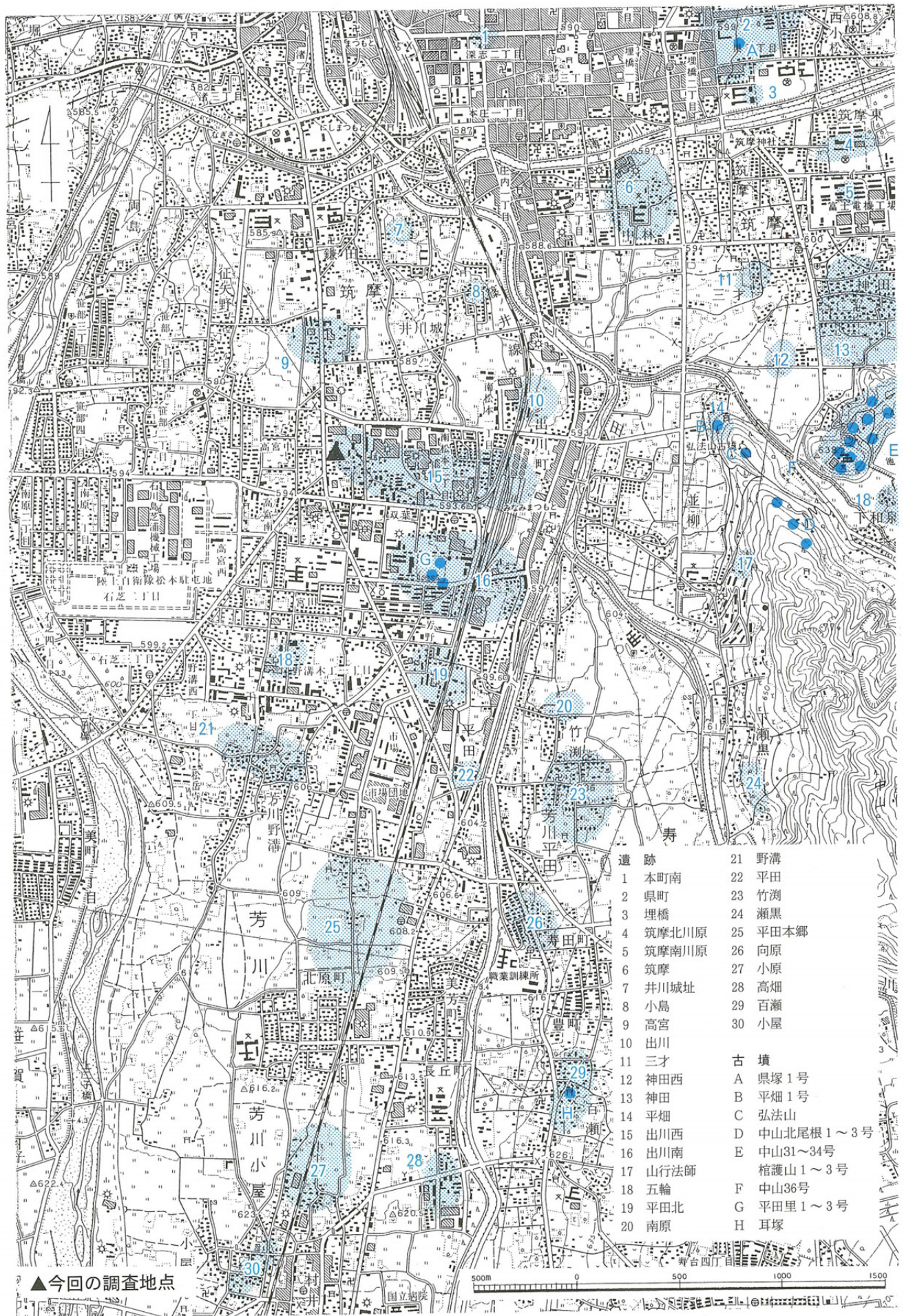
混入物

A 小 礫	F 炭化物塊	K 茶褐色土粒	P 砂 粒	U 灰色土粒
B 礫	G 炭化材	L 黄色土塊	Q 黒色土粒	V 灰色土塊
C 焼土粒	H 黄色土粒	M 黄褐色土塊	R 黒色土塊	W 赤褐色土粒
D 焼土塊	I 黄褐色土粒	N 橙褐色土塊	S 暗褐色土粒	X 赤褐色土塊
E 炭化物粒	J 橙褐色土粒	O 茶褐色土塊	T 暗褐色土塊	Y 鉄 分

7. 本調査で出土した遺物及び調査の記録類は松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館（〒399-0823 長野県松本市中山3738-1 TEL 0263-86-4710 FAX 0263-86-9189）に収蔵されている。

目 次

序	
例 言	
目 次	
Ⅰ 調査の経緯	
1. 調査に至る経過	1
2. 調査体制	1
Ⅱ 遺跡の環境と調査の概要	
1. 周辺遺跡と過去の考古学的調査	2
2. 調査の方法と概要	3
Ⅲ 遺構・遺物	
1. 検出遺構	
(1) 配石遺構	7
(2) 土器集中地点	8
(3) 火葬墓	10
(4) 溝状遺構	10
2. 出土遺物	
(1) 土 器	17
(2) 土製品	20
(3) 金属製品	20
Ⅳ まとめ	28
付 編	
1. 出川西遺跡放射性炭素年代測定結果報告	29
2. 出川西遺跡の既出資料について	30
図 版	
報告書抄録	



第1図 調査地の位置と周辺遺跡

Ⅰ 調査の経緯

1. 調査に至る経過

松本市のほぼ中央に位置する南松本周辺は、古くから商工業地域として開発が進んでいる地域である。近年の商圈の変化にともない、この地域が新たな商業地域として注目され、大規模小売店舗やマンションなどの建設が相次いでいる。

平成8年、松本市双葉・高宮中の一帯に大規模店の建設事業が計画された。当該地は遺跡地図上で出川西遺跡の範囲内にあり、平成5年に出川遺跡として一度調査が行われ（調査名：出川Ⅲ）古墳時代の遺構・遺物が検出された地点が含まれていた。

そこで松本市教育委員会では事業主体である株式会社イトーヨーカ堂・松電商事株式会社と遺跡の保護について協議を行い、当該地における遺構・遺物の有無について確認するため、まず松本市教育委員会が試掘調査を実施することとし、その結果を受けて再協議を行うこととなった。

試掘調査は当該地域の南半部についてはすでに平成5年に行われているため北半部をはじめとする未実施の範囲に対して行われ、平成5年調査地点周辺に古墳時代の遺物包含層が広がることが確認された。これを受けて関係者により再協議を行った結果、建物建設部分については遺構・遺物の破壊が避けられないため、保護措置として工事着手前に発掘調査を実施して遺跡の記録保存を図ることとなった。

発掘調査は松本市が事業主体である株式会社イトーヨーカ堂・松電商事株式会社より委託を受け、調査業務は松本市より再委託を受けた(財)松本市教育文化振興財団・松本市立考古博物館が、委託・再委託にかかる事務処理を松本市教育委員会が行うこととなり、平成8年9月9日～11月14日の間現地における調査が実施された（調査名：出川西遺跡Ⅵ）。その後松本市教育委員会では平成9年度に室内における整理作業及び本報告書の作成を、平成10年度に本報告書の刊行を行った。

2. 調査体制

調査団長 守屋立秋（松本市教育長）

調査担当者 神田訓安、竹原 学、高桑俊雄、長畦和正、村田昇司

調査員 太田圭郁、松尾明恵

協力者 赤羽包子、浅井信興、浅輪敬二、荒井留美子、飯田三男、五十嵐周子、石合英子、石井脩二、市場茂男、上兼昭一、内川初雄、内沢紀代子、内田和子、大月八十喜、開嶋八重子、上條尚美、上條道代、神田栄次、清沢智恵、清沢由美、小松正子、小松幸美、斉藤政雄、鷺見昇司、竹平悦子、鶴川 登、堤 加代子、寺嶋 実、中村恵子、中村安雄、中山自子、林 和子、林 武佐、藤本利子、布山 洋、洞沢文江、水野桂子、三代沢二三恵、三宅康司、宮坂ふみ、村松恵美子、村山牧枝、甕 國成、百瀬二三子、百瀬二三子、百瀬義友、山崎照友、横山 清、米山禎興

事務局

<平成8年度>

松本市教育委員会 岩淵世紀（文化課長）、熊谷康治（文化課長補佐）、田多井用章

（財）松本市教育文化振興財団

事務局 大池 光（事務局長）、手塚英男（局次長）、川窪 茂（次長補佐）

考古博物館 村田正幸（館長）、松沢憲一、近藤 潔、川上真澄

<平成9年度>

松本市教育委員会 木下雅文（文化課長）、熊谷康治（文化課長補佐）、村田正幸（文化財担当係長）、

久保田 剛、近藤 潔、上條まゆみ

II 遺跡の環境と調査の概要

1. 周辺遺跡と過去の考古学的調査

出川西遺跡は奈良井川扇状地と田川・牛伏川扇状地の接する沖積扇状地性堆積の末端に位置している。この地形面上には弥生時代から中・近世に至るまで、数多くの遺跡が密集しているが、早くから都市化が進んだこともあり、遺跡の存在は知られていたもののその実態は不鮮明であった。しかし昭和60年代以降、集合住宅や公共施設、大規模店舗の建設等にもなう発掘調査が急増し、それによってこの地域における考古学的状況が明らかになってきている。ここでは過去の調査成果をとおして出川西遺跡とその周辺、田川と奈良井川に挟まれた一帯に分布する遺跡群について概観してみたい（第1図参照）。

高宮遺跡と出川遺跡は本（出川西）遺跡より北に位置する遺跡である。高宮遺跡は本報告の調査地点の北北西500mの位置にあり、これまで2回の調査（高宮Ⅰ：平成5年、高宮Ⅱ：平成9年）で古墳時代中期の祭祀跡をはじめ、同時期の住居址8棟、合口甕棺墓などが検出されている。初期須恵器をともなう古墳時代中期の土器集中の存在など、本遺跡との関係も注目される。出川遺跡は本遺跡の北東、田川と接する位置にあり、中世の集落跡が確認されている（出川Ⅰ：平成元年）。

本遺跡の南には出川南遺跡、平田北遺跡、平田遺跡、平田本郷遺跡などが所在している。出川南遺跡はこれまで7回の調査で弥生時代後期、古墳時代後期、奈良・平安時代の住居址計200棟近くが検出され、特に6世紀末から7世紀前半にかけて大規模な集落が形成されたことが判明している（出川南A1→出川南Ⅰ：昭和61年、出川南B1→出川南Ⅱ：昭和63年、出川南B2→出川南Ⅲ：平成元年、出川南BⅢ→出川南Ⅳ：平成3年、出川南Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ：平成10年、各調査名→の左側は旧称、右側は改称を示す）。また平成3年の調査（出川南Ⅳ）では5世紀代から6世紀初頭の古墳3基が発見され（平田里1～3号墳）、1号墳の周溝からは多量の埴輪、土師器・古式須恵器が出土した。平田北遺跡では奈良・平安時代の集落址が確認され（平田北Ⅰ：平成4年、平田北Ⅱ：平成5年、平田北Ⅲ：平成6年）、平田本郷遺跡ではこれまでに奈良・平安時代を主体に118棟の住居址、10棟以上の掘立柱建物址が発見されている（平田本郷Ⅰ：平成4年、平田本郷Ⅱ：平成6年、平田本郷Ⅲ：平成10年）。

最後に出川西遺跡について、本遺跡の調査履歴は以下に示すとおりで、これまでに合計7回を数える。

昭和60年	調査名：出川（改称：出川西Ⅰ）	市営住宅建設	
平成5年	調査名：出川Ⅲ	店舗建設	本報告
	出川西Ⅱ	市営住宅建設	遺物を本報告で紹介
平成7年	調査名：出川西Ⅲ	〃	
	出川西Ⅳ	〃	
平成8年	調査名：出川西Ⅴ	〃	
	出川西Ⅵ	店舗建設	本報告

これまでにⅠ・Ⅱ次調査において弥生時代中期の住居址2棟が検出され、JR篠ノ井線付近から今回の開発対象地東縁まで同時期の包含層が広がるものと推定される。また各調査で古墳時代前期や平安時代の包含層、遺構・遺物も確認されており、広大な遺跡推定範囲の中に当該期の生活域が存在したものと推定される。今回の調査地点は遺跡の西端域にあたり、平成5年の調査（出川Ⅲ）と今回の調査では特異な石棺状の配石遺構など古墳時代中期の遺構・遺物が見出されている。その点ではむしろ本遺跡に北接する高宮遺跡との関係が注目され、古墳時代中期の遺跡分布のあり方を考える上で非常に示唆的である。

2. 調査の方法と概要

(1) 調査区の設定と調査の方法

今回の開発は国道19号線の東側、松本市双葉から高宮中にかけての南北約290m、東西約190mの範囲が対象となった。調査の手順としては平成5年度実施の発掘調査と試掘調査、及び平成8年度に追加実施した試掘調査の所見から、地下への掘削の及ぶ店舗本体建物と屋上駐車場へのスロープ部分の合計約11,000㎡について遺構の破壊が避けられないため面的調査を行うこととし、駐車場等の表面的な工事だけが実施される部分については試掘にとどめることとした。また面的調査の範囲には平成5年の調査区約1,980㎡が含まれるため、この部分についても除外した。結果的に調査は開発対象地の北半部が試掘主体、南半部が面的調査主体となり、実質的な面的発掘調査の範囲は南北165m、東西96m、面積にして6,120㎡となった。

調査は古墳時代中期の遺物包含層付近まで重機により掘削し、以後の作業は人力にて行った。遺構は明確に輪郭の把握される溝などについては通常の手順で掘り下げ作業を行ったが、古墳時代中期の遺物出土地点については明確に遺構としての形が捉えられなかったため、グリッドおよびトレンチによる掘り下げを行った。測量作業は真北方向を基準に3m方眼を設定しこれを基としたが、国家座標値は導いていない。

(2) 調査地点の土層構成

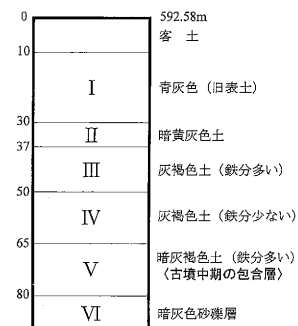
今回の調査地点における標準的な土層構成は第2図に示すとおりである。遺構検出は第IV層中で行い、中世以降の遺構は第III中～第IV層上面で確認される。古墳時代の遺物包含層である第V層は分布にむらがあり、第VI層が溝状あるいは凹地状に落ち込んでいる部分でのみ捉えられる。そうした部分では第IV層も概して厚い。また特に第VI層の落ち込みが著しい部分では、第V層と第VI層の間に砂質土や砂層がはさまっている。この第VI層の落ち込みは南東から北東方向に帯状にのびる傾向があり、第VI層の堆積時かあるいはそれ以後の流路により形成されたと考えられる。そして古墳時代中期頃にはかなり埋没が進み、ゆるい起伏のある湿っぽい地形を呈していたものと推定される。なお開発対象地の北東部では第V層の安定的な水平堆積がみられ、さらに下層には弥生時代の遺物包含層も存在しており、より安定した地形の状況が窺われる。

(3) 調査の概要

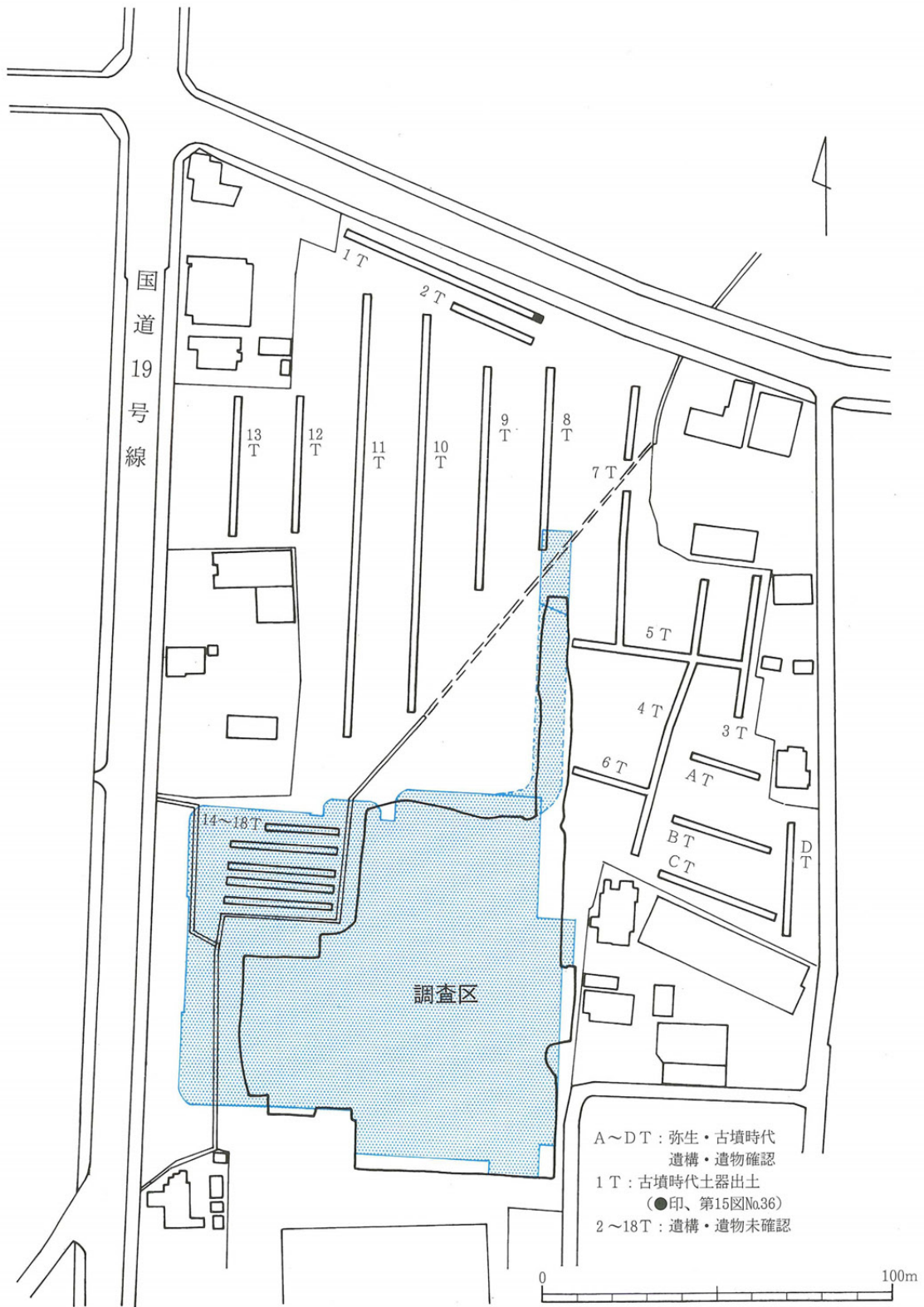
以下に出川西遺跡第VI次調査の概要について記す。なお平成5年調査（出川Ⅲ）のデータも併記しておく。

調査期間	出川西Ⅵ	平成8年9月9日～11月14日
	出川Ⅲ	平成5年9月6日～11月29日
調査面積	出川西Ⅵ	6,120㎡
	出川Ⅲ	1,980㎡
検出遺構	配石遺構	7基（古墳時代中期6、不明1）
	土器集中地点	19カ所（古墳時代中期）
	火葬墓	1基（中世）
	溝状遺構	15条（中・近世）
出土遺物	古墳時代中期	土器（土師器・須恵器） 鉄製品（鏃・鎌他）
	中・近世	陶器、銅製品（銭・キセル）

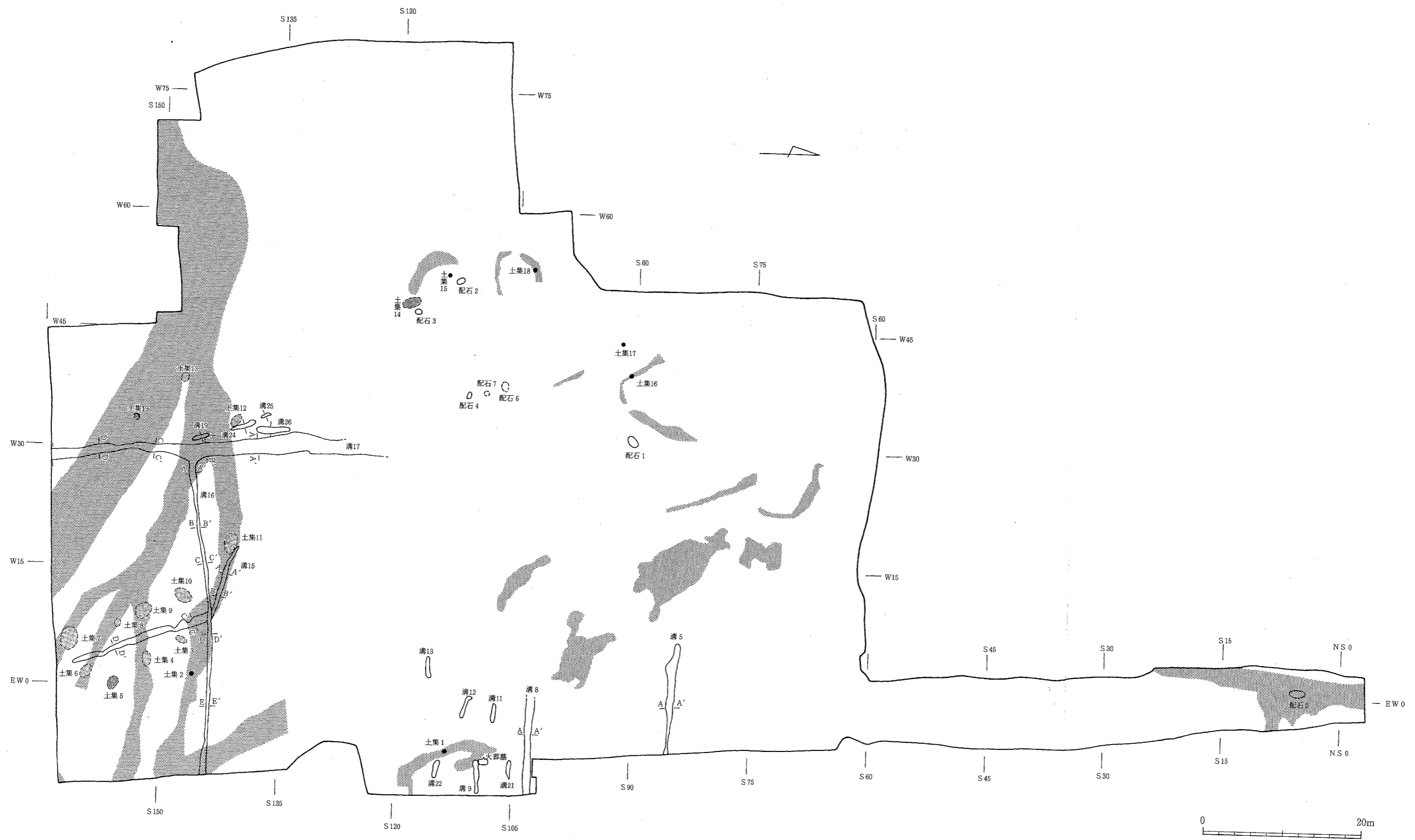
調査区南壁（土器集中7南側）



第2図 基本土層



第3図 調査範囲



第4図 遺構配置

III 遺構・遺物

1. 検出遺構

(1) 配石遺構（第5～7図）

平成5年調査地点において古墳時代中期に帰属するものが6基（配石1～4・6・7）、今回調査で時期不明のものが1基（配石5）、合計7基検出された。これらは石棺状に石組みの行われるもの（配石1～4）、礫10数個が集中するだけのもの（配石6・7）、その他（配石5）に分けられる。

①第1号配石遺構（第5図）

調査区の北寄り、S90-W30グリッドに所在する。構造的には長さ25～40cmほどの棒状礫37個を配した石棺状の構築物である。本址は平・断面ともに舟形と呼ぶにふさわしい形態を呈しており、あるいはそれを意識している可能性もある。以下、舟形とみた場合の舳先側を先端部として遺構の記述する。

各壁の礫は先端部ではほぼ垂直、他は階段状に2～3段積み上げている。先端部分には棒状礫を長軸方向に配し、遺構の方向性を強調しているようにみられる。底面は砂質土層中に設けられ、先端側のレベルが若干高く小口幅も大きい。各部の計測値は底面の内法が長軸長76cm、先端側の小口幅18cm、末端側の小口幅13cm、壁最上面での内法長軸長81cm、幅41cm、壁上面から底面までの深さ15～25cm、検出面からの深さ33～39cm、長軸方位N-53°-Eを測る。さらに礫積みの上面には明らかに蓋石と受け取られる棒状礫7個が長軸に直交して並べ置かれ、別の礫2個で壁との隙間が埋められている。蓋石は配石の底面から7～11cm浮き、中央部の礫が若干低く落ち込んでいることから構築当時内部が空洞であったことがわかる。なお配石の掘り方は長径166cm、短径103cmの長楕円形を呈している。

本址内からの出土遺物は皆無であるが、遺構外西から南に隣接して土器集中14が存在、古墳時代中期の土師器杯などが出土している。

②第2号配石遺構（第6図）

S111-W51グリッドより検出された。本址は配石1に比較して礫積みの保存状況はよくないが、形態的にはやはり舟形を呈し、先端部分の棒状礫の配し方、側壁の礫積みのあり方などに配石1との強い共通性が窺える。蓋石は西壁上に原位置をとどめて並べ置かれた部分がある他は乱れており、意図的に破壊されている可能性もある。南西外に散乱する礫も本来蓋石として用いられたものであろう。一方、北側、先端部分の外側にも壁上面レベルに礫14個が集積しているが、意図をもって配されたのか、あるいは本来蓋石や壁構築材として用いられたものが廃棄されたのか、にわかに判断しがたい。底面はやはり先端側が高まり、小口幅も広がっている。配石各部の寸法は底面での内法が長軸長約80cm、幅15～20cm、壁上面での内法長軸長約80cm、幅最大43cm、壁上面からの深さ30cm、長軸方位N-36°-Wを測る。掘り方は長径107cm、短径80cmの小判形を呈している。遺物はまったく出土していない。

③第3号配石遺構（第5図）

S117-W48グリッドで検出された。本址は礫の状況や形態のあり方が配石1・2とはやや異なっており、むしろ配石4との共通点が窺える。配石の平面形態は長方形を呈し、小口部分には礫が配されていないか、失われている。側壁は扁平礫を立てており、箱型石棺状を呈する。この点が配石1・2と異なる点である。

底面は北側でやや低くなるが、小口幅は逆に大きい。各部の計測値は底面の内法が長軸長80cm内外、幅25～31cm、壁石上端から底面までの深さ最大18cm、長軸方位N-5°-Wである。掘り方は楕円形を呈し、長径98cm、短径77cmを測る。

遺構周囲の検出面からは古墳時代中期の土師器杯2個体分の破片が散在的に出土しており、本址に伴う可能性が高い。

④第4号配石遺構（第6図）

本址はS111-W36グリッドで検出された。配石1と並び、残存状況の良い遺構である。基本構造は配石3と同様、扁平礫や棒状礫を直立させて側壁を設け、小口壁は棒状礫を横に積み上げた、長方形を呈するものである。底面は土床としている。蓋石は配石1と同様、棒状礫を長軸に対して横位に並べ置く。また側壁上端から外側にかけて、縁礫や小さめの棒状礫を多数配して補強を行っている。

各部の寸法は底面中央での長軸長60cm、幅18cm、礫積み上端から底面までの深さ最大28cm、長軸方位N-108°-Eを測る。掘り方は礫積みより一回り大きく、長さ85cm、幅45cmを測る。壁石と掘り方の隙間には灰褐色土を詰めている。

遺物は北側壁外の東隅から完形の鉄鎌1点が出土、刃先を外側（北）に向け置かれたものと考えられる。

⑤第5号配石遺構（第7図）

S6-EW0グリッドで検出された。層位的には旧表土の直下にあたり、年代的には新しく中世か近世のものと考えられる。遺構は長さ165cm、幅45cm程の範囲に3～7cm大を主とする小礫を厚さ11cmほどに集積し、その北縁から西縁を10～20cm大の礫による石列が囲んでいる。石列および内部の礫の上面レベルはほぼ水平である。また長軸の方位はNS0°である。伴出遺物はなく、何の意図をもって構築されたものか不明である。本址からの遺物の出土はない。

⑥第6・7号配石遺構（第7図）

配石4の北側、S105～108-W3～6グリッドで近接して2基が検出された。層位的には配石1～4や土器集中と同一面に存在し、古墳時代中期の遺構と考えられる。配石6は12～20cm大の礫12個が南北93cm、東西125cmの範囲に集中するが中央部には礫がみられない。配石7は8個の礫が南北44cm、東西56cmの範囲に集中する。いずれの遺構も礫はほぼ同一レベルに分布している。遺構にともなう確実な遺物の出土はない。

(2) 土器集中地点（第7～9図）

古墳時代中期の土器が包含層中から複数まとまって、あるいは完形に近い個体が単独で出土した地点を土器集中地点として呼称した。これらは特に住居址や土坑等の遺構にはともなわないが、大半が古墳時代中期の遺物包含層が落ち凹んだ個所にあり、復元可能な個体が多いことから、何らかの行為にともなう凹地やその縁に置かれたり廃棄されたものと考えられる。大小合わせて19個所で検出され、分布的には調査区南東部の土集2～11の一群、若干空間をおいた西側の土集12・13・19からなる一群、調査区中央西寄りの配石1～4周辺に分布する土集14～18の群にまとめ、さらに前二者が複数個体の土器やその他の遺物で構成されるのに対し、後者は単独での土器出土が多い傾向にある。したがってこの両者は性格的に若干異なっているのかもしれない。なお凹地状地形については前章でも触れたように、流路等の自然作用により形成されたものが古墳時代中期に至って埋没が進行し、ゆるい起伏のある地形となったものと考えられる。凹地は幅1～数mの帯状を呈し、南東から北西方向に走る傾向が窺える（第4図にスクリーントーンで示している）。

土器集中地点 1 調査区の東縁部にあり、南北に弧状にのびる浅い凹地状地形の中から検出された。土師器甕1個体分の破片が50cmほどの範囲に、第V層中ではほぼ同一レベルに集積していたが、細片が多く接合には至らなかった。この周囲の凹地状地形内外からも別の土師器の小破片が散在的に出土している。

土器集中地点 2 調査区南東部から検出された。東西に走る凹地状地形の南縁部より、完形の土師器杯(4)と初期須恵器の杯(3)が凹地に落ちかかるような状況で出土した。状況から本来は並べ置かれたか重ねられていた可能性がある(第8図)。

土器集中地点 3 土集2の西側、同じ凹地状地形の南縁にある。第V層中の南北120cm、東西50cmの範囲に土師器片7点以上が集中するが接合品は少なく、埴の底部1点(5)を図示できたのみである。

土器集中地点 4 土集2・3の南に、東西に走る別の凹地状地形があり、その北縁から凹地内にかけての南北110cm、東西200cmの範囲の第V層中に土師器片が集中していた。しかし点数が少ない上接合・図化できるものはみられなかった。

土器集中地点 5 土集4南側の平坦面上にある。南北140cm、東西120cmの範囲から土師器片11点以上が出土したが、別個体の小破片ばかりで接合・図化しうるものはない。

土器集中地点 6 土集5の南、南東から北西に走る浅い凹地状地形の南縁、第V層中約150cm四方の範囲に土師器片が分布していた。やはり別個体の破片が多く接合・図化できるものはない。

土器集中地点 7 土集6の南西、南東から北西に走る浅い凹地状地形の北縁から内部にかけての南北200cm、東西250cmの範囲から20点以上の土師器片、鉄製品2点、形態不明の土製品20点以上が出土した。土師器は破片が散在し、接合の結果はほぼ完形の小形甕1点(7)と高杯の脚部1点(6)が図示できたが、大半は接合できないものである。土製品も一括品と考えられるが接合できるものは少なく、全形や個体数は不明である(図版参照)。

土器集中地点 8 土集6の北西、同じ凹地状地形の北縁、南北75cm、東西100cmの範囲から接合するとほぼ完形になる土師器杯(8)・小形甕(9)の破片が4点以上出土した。

土器集中地点 9 土集4の西、同じ幅180cm、深さ20cmの凹地状地形の両縁から内部にかけて検出された。土器集中の中では最も規模が大きく200cm四方の範囲から土師器杯3(10~12)・高杯1(13)・埴4個体以上(14~17)の完形品がまとまって出土、あたかも凹地の縁に置き去りにされたものが崩壊し、内部に落ちこんだかのような状況を呈している(第8図)。より詳しくみると凹地の北縁には埴1点を含む2個体、南縁から内部にかけて杯3点、高杯1点、埴2点以上があった。そのうち4個体については原位置でつぶれたような状況を呈している。

土器集中地点10 土集3の西に独立した楕円形の凹地状地形があり、その南縁から内部にかけておよそ南北220cm、東西190cmの範囲から遺物が多く出土した。接合の結果土師器杯(18)・埴(19)・壺(20・21)・小形甕(22)など4個体を図示することができたが大半は破片で、南縁からつぶれた状態で出土した小形甕のみほぼ完形である。

土器集中地点11 土集10の北西、土集2・3から続く凹地状地形の北縁から内部にかけて、南北170cm、東西290cmの範囲に土師器高杯3個体分(23~25)の破片が集中していた。このうち1点は脚部が凹地の縁にあり、杯部の破片が内部にかけて散っていたことから、本来は凹地の縁に置かれていたものと想像される。なお高杯以外の破片はまったくみられない。

土器集中地点12 土集2~11からのびる凹地状地形と土集4~9より続く凹地状地形の合流点の北縁にある。平坦面上の南北120cm、東西140cmの範囲から同一個体の土師器杯1個体分(26)の破片が出土し、他の個体はみられない。

土器集中地点13 土集12と窪地状地形を隔てて対岸、東南の土集19の方向からくる別の凹地状地形とに挟

まれた面の合流点先端から検出された。検出面からかなり深い位置にあり、100cm四方の範囲から土師器片と鉄鏃1点が出土した。土器は完形となるものはないが、壺の口縁部2点(27・28)を図示した。

土器集中地点14 配石3に近接しその西から南にかけて完形の土師器杯1個体分(29)と別個体の小破片が出土した。土師器杯は大半の破片が1カ所につぶれた状態で出土している。

土器集中地点15 配石2の南西に近接して検出された。土師器高杯の杯部(31)のみ単独でつぶれた状態で出土している。

土器集中地点16 配石4・6・7の北方、配石1の西方に位置し、幅の狭い凹地状地形の底面から土師器埴1個体(32)がつぶれて出土した。

土器集中地点17 土集16北西の平坦面から土師器無頸壺1点(33)が完形で出土した。

土器集中地点18 配石2の北側、弧状を呈する狭い凹地状地形の底面に検出された。底部を欠く土師器二重口縁の壺1個体(34)が出土した。

土器集中地点19 土集13の南東にあり、南東～北西に走る幅の広い凹地状地形の北寄り底面、80cm四方の範囲から土師器片が集中して出土した。接合の結果、ほぼ完形の土師器小形甕(30)となったが、接合できない別個体の破片も存在する。

(3) 火葬墓 (第8図)

調査区の東縁、S108-E12グリッドから単独で検出された。掘り方本体は長方形を呈し、底面での寸法は長さ63cm、幅35cmを測る。検出面から底面までの深さは23cmである。壁面はオーバーハングし、上部ほど被熱硬化が著しい。底面はあまり焼けていない。西壁中央にはこの形態の火葬墓に特有の壁面の被熱した張り出し部がとりつき、そこから東壁までの底面は溝状に一段深い。覆土は灰褐色土を主体とし、下層には多量の木炭と少量の焼土塊、微細な焼骨片がみられた。遺物は被熱の著しい銅銭が張り出し部寄りの覆土下層から2点(銭種不明)、南壁下から1点(永楽通寶)出土している(図版参照)。

本址はその形態から中世に帰属するものと考えられるが、出土した永楽通寶が初鑄1,408年であること、出土した炭化材による放射性炭素年代測定の結果から西暦1,460年の年代が得られており(付編参照)、室町時代、15世紀代の所産である可能性がきわめて高い。

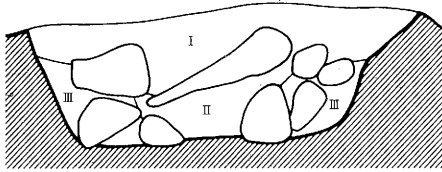
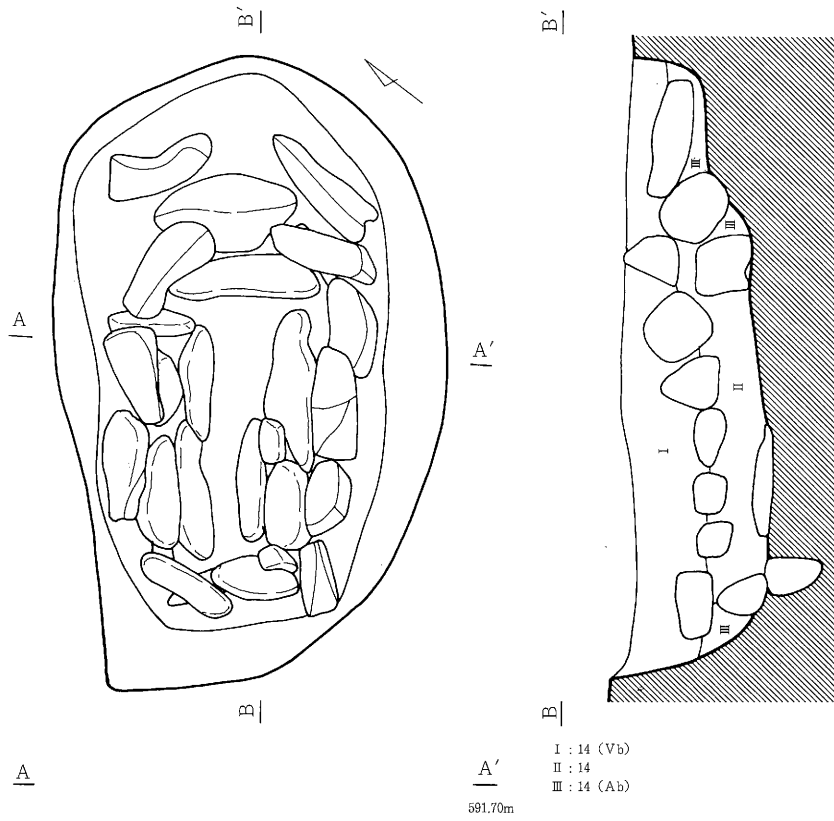
(4) 溝状遺構 (第4・10図)

中世あるいは近世以降の溝状遺構が15条検出されている。このうち流路的なものに溝5・8・15～17がある。溝15を除きほぼ正確に南北または東西に走り、掘り込みも安定している。これらの覆土は暗灰色の砂質土で、底面には鉄分の沈着が認められる。遺物はわずかに陶器片が得られたのみである。溝15はこれらと方向性等が異なっており、時期的にも溝16に先行することから年代や性格が異なるものと見られる。

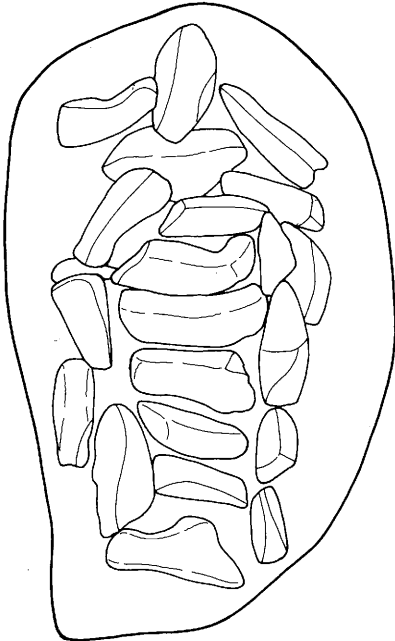
調査区の東部、火葬墓周辺からは幅50～60cm前後、長さ230～420cmの溝状の掘り込みが6条検出された(溝9・11～13・21・22)。いずれも形態や規模、覆土の状況が酷似し、方向や配置にも規則性が窺える。同一の意図をもって掘り込まれたものと考えられよう。遺物はまったく出土していない。

このほか、溝17の西側に溝24～26・29があり、溝26は溝17と平行に走り同時期のものと推定される。溝24・25・29は本来1条の溝が断続したものと捉えられ、覆土や方向性から溝15と同時期のものと考えたが、古墳時代中期以降、中世の間のいずれの時期に比定されるのか、出土遺物がないため不明である。

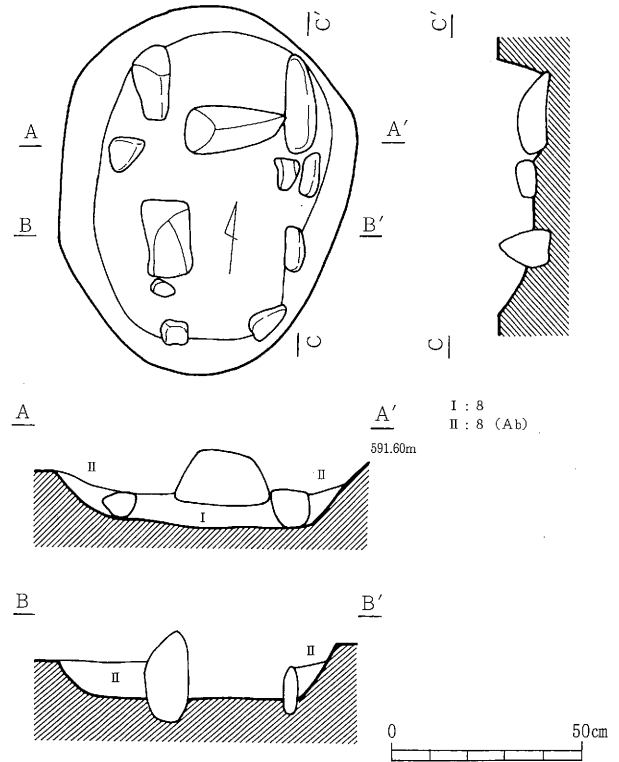
配石 1



配石 1 蓋石の状況



配石 3

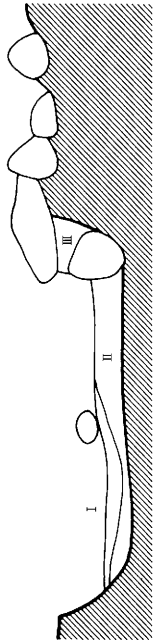
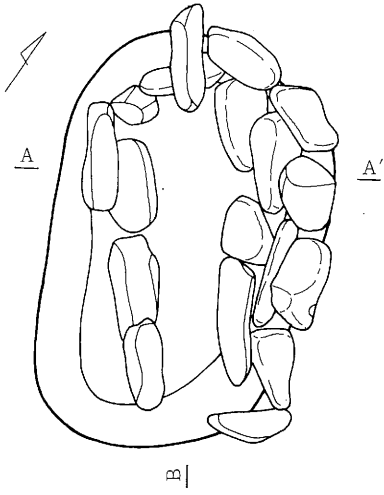


第5図 検出遺構 (1)

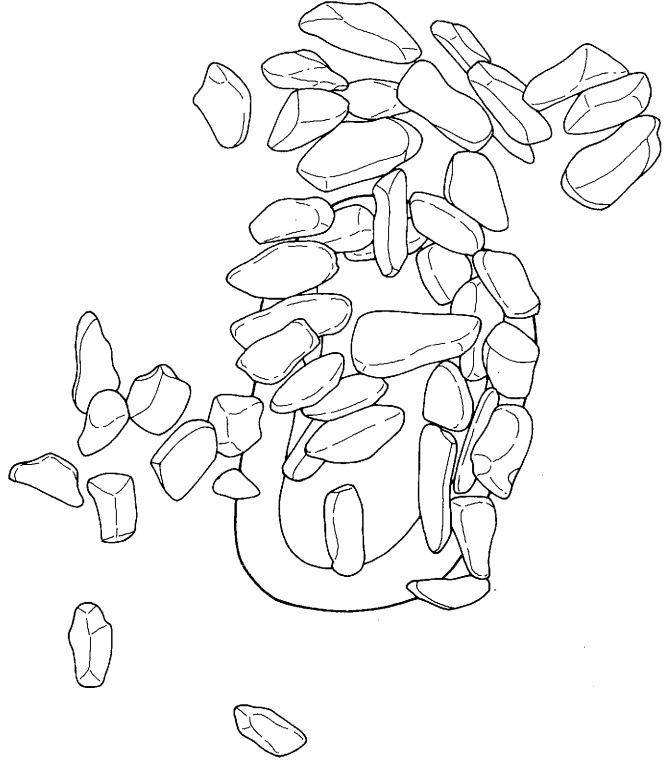
配石 2

B|

B'|

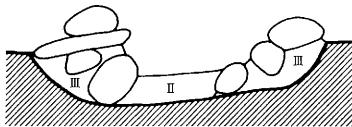


配石 2 礫・蓋石出土状況



A

A'



591.80m I : 11
II : 8
III : 8 (Ab)

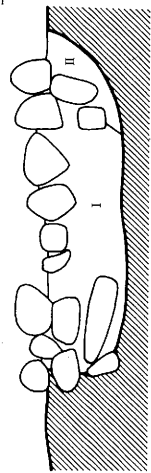
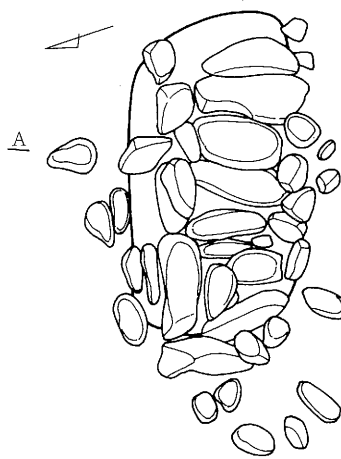
配石 4

配石 4 蓋石除去後の状況



B|

B'|

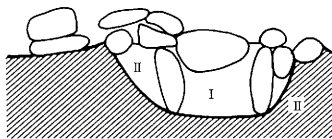


B|

B'|

A

A'

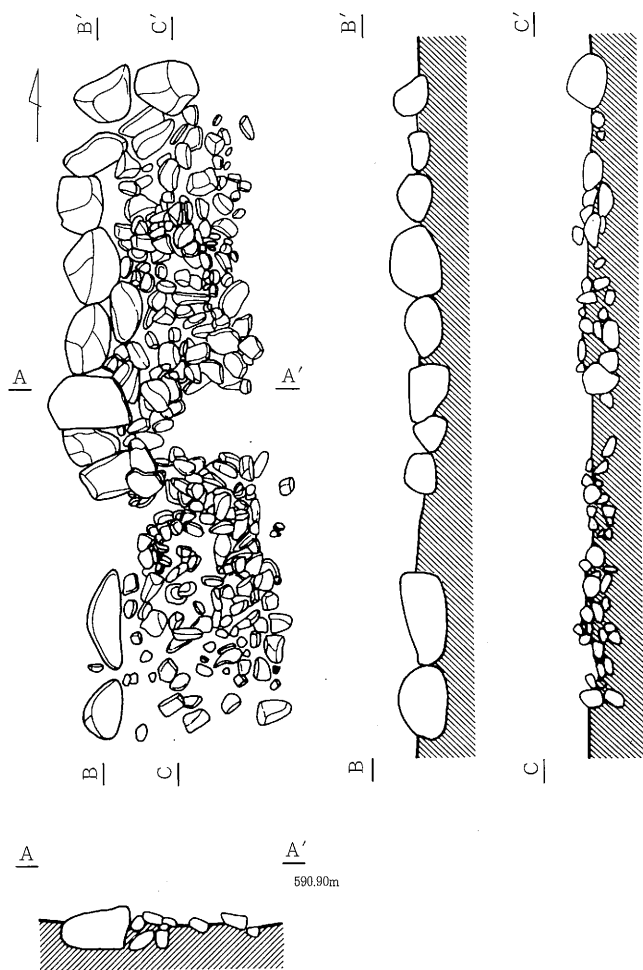


591.60m I : 8
II : 8 (Ab)

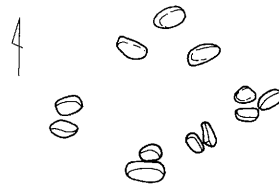


第6図 検出遺構 (2)

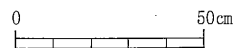
配石 5



配石 6



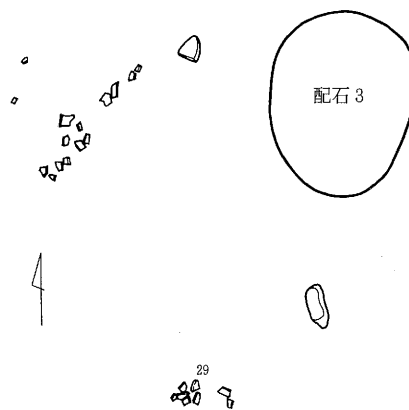
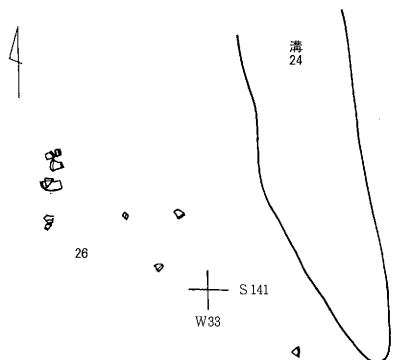
配石 7



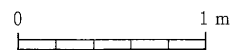
土器集中14

S 117
W 48

土器集中12

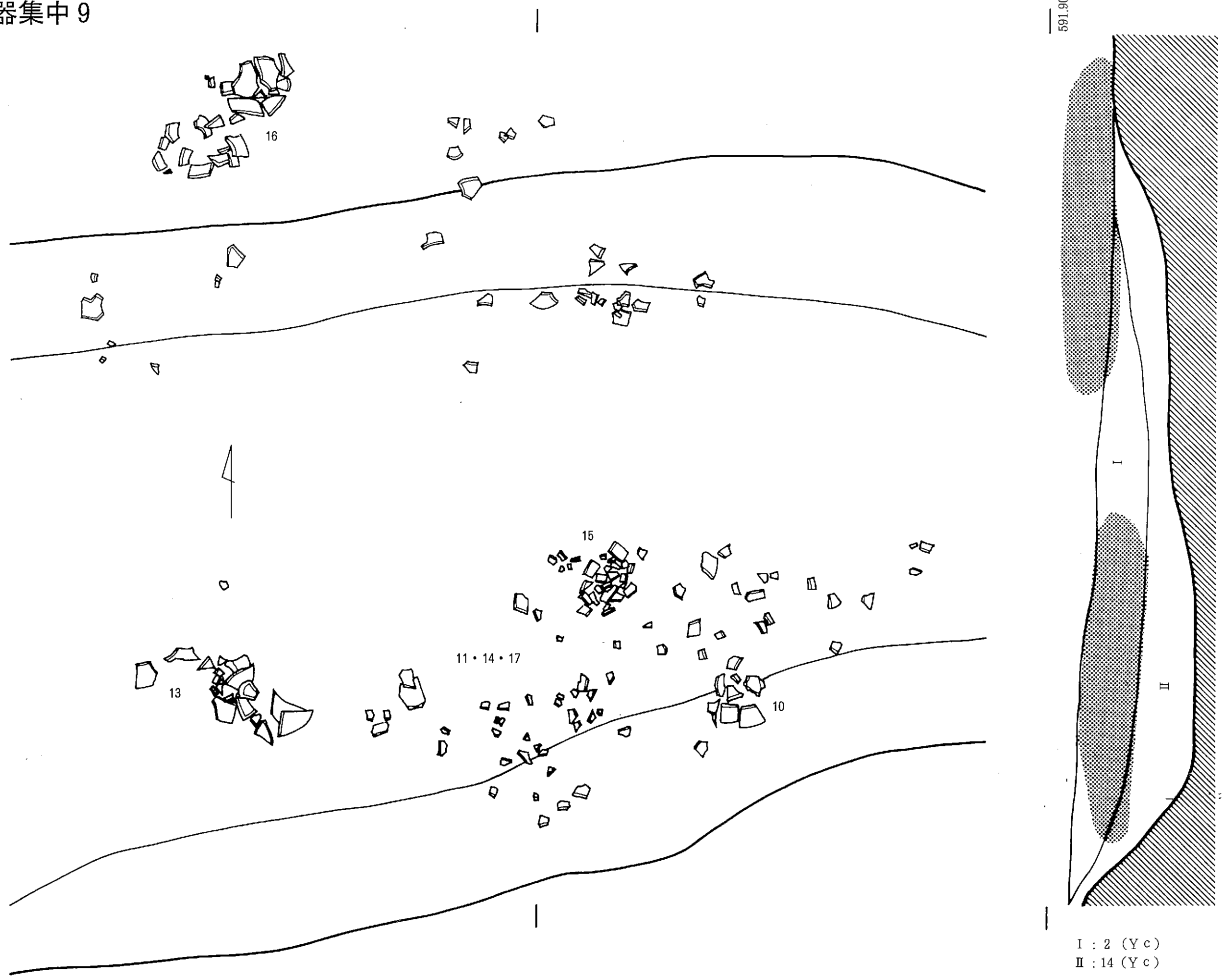


S 120
W 48

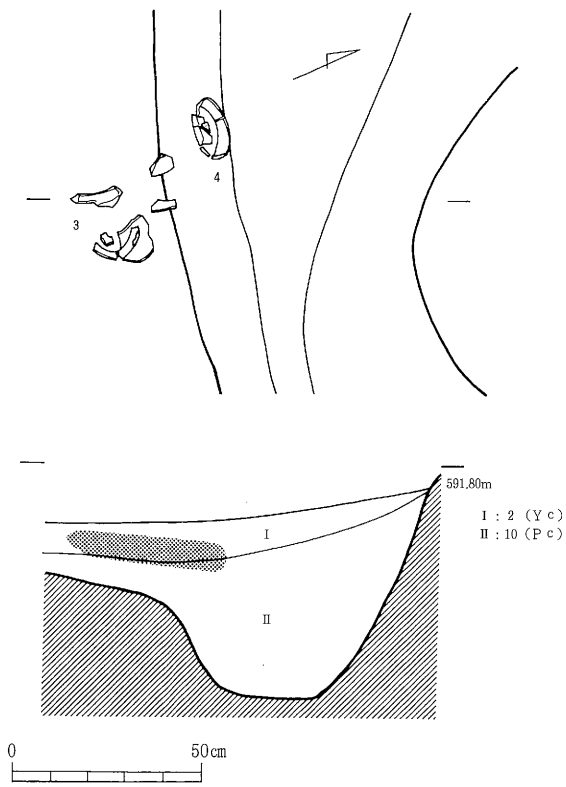


第7図 検出遺構 (3)

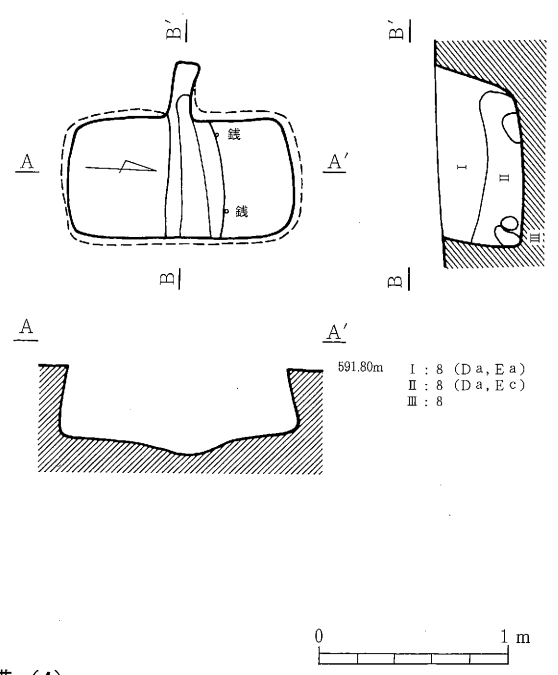
土器集中9



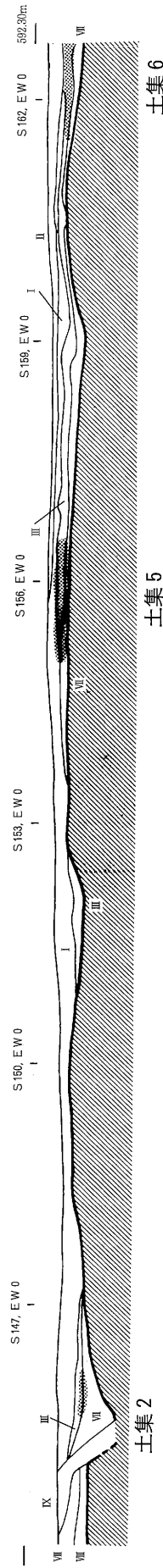
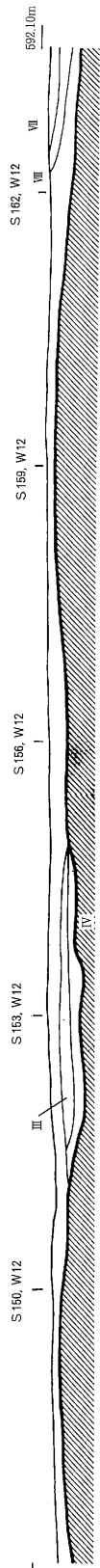
土器集中2



火葬墓



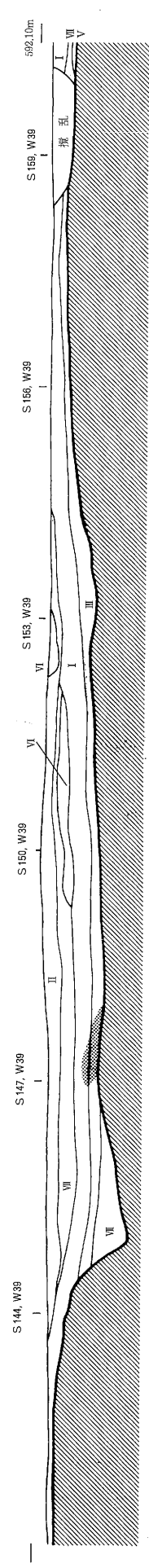
第8図 検出遺構(4)



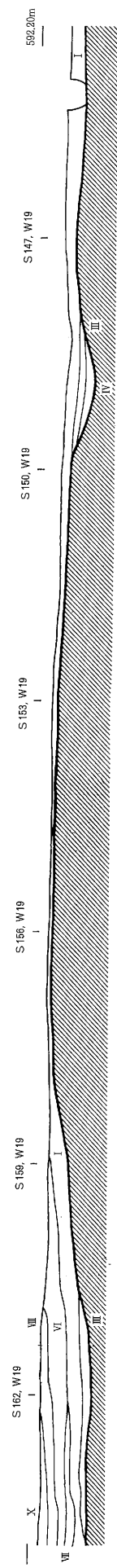
土集 6

土集 5

土集 2

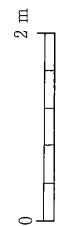


土集 13



土集 11

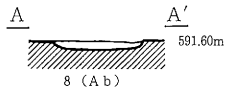
- I : 8 (Yb)
- II : 8 (Ya)
- III : 2
- IV : 14 (Yc)
- V : 11
- VI : 21 (Ya)
- VII : 21 (Yc)
- VIII : 22
- IX : 10 (Ya)
- X : 8 (Yc)



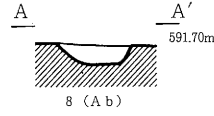
第9図 検出遺構 (5)

溝状遺構

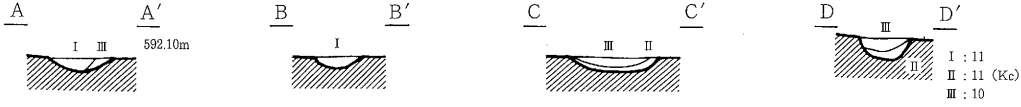
溝5



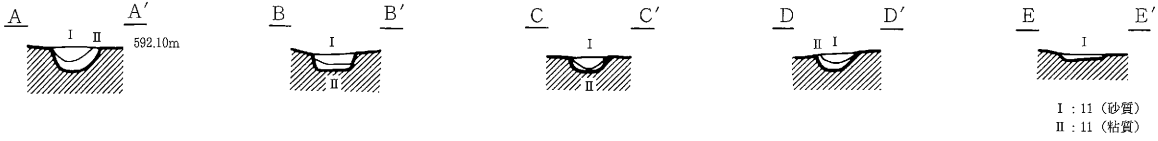
溝8



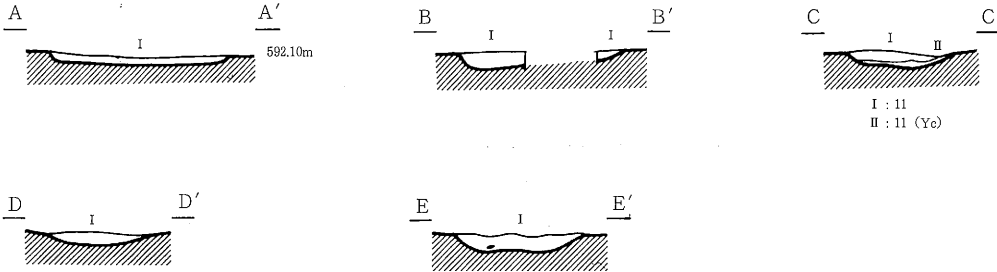
溝15



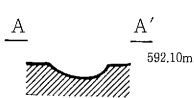
溝16



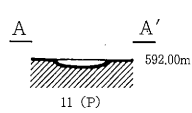
溝17



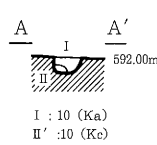
溝19



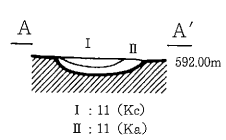
溝24



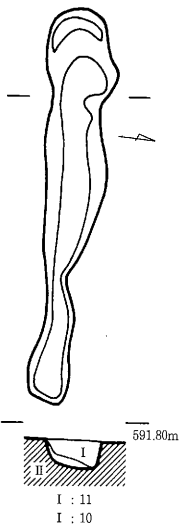
溝25



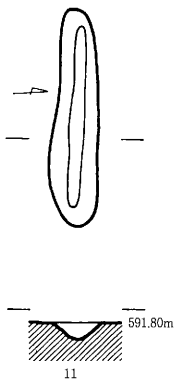
溝26



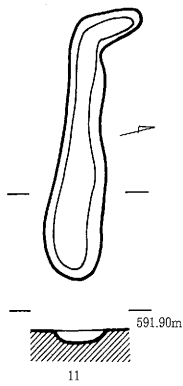
溝9



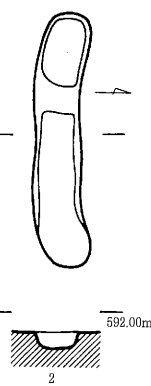
溝11



溝12



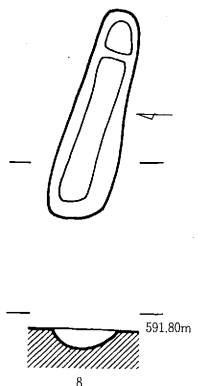
溝13



溝21



溝22



第10図 検出遺構 (6)

2. 出土遺物

(1) 土器 (第1表、第14・15図)

土器集中、グリッド及び試掘トレンチ内から土器の出土をみているが、総量はコンテナ4箱と多くない。このうち図化提示できたものは36点で、いずれも古墳時代中期、5世紀代の土器と推定される。

①種別・器種・器形

種別は土師器と須恵器だが、須恵器は1点のみで他はすべて土師器である。器種では、土師器には大別して杯・高杯・埴・壺・甕・小形甕があり、須恵器は蓋杯である。なお、当地域の古墳時代中期の土師器について器種器形一覧を第11図に示す。本稿の分類も基本的にこれに従っている(以下、器種名に冠する「土師器」は省略し、須恵器の場合のみ表記する)。器面調整は第1表を参照されたい。

杯 12点を図化提示できた。杯Aは丸底をもつ体部から口縁が短く外反・外開する外形を呈すもので、頸部内面に明瞭な稜をもつ。しかも身の深いもの(杯A1:12・18)とやや浅めのもの(杯A2:1・8・10)に細分される。杯Cは口縁部が「く」の字に括れる頸部から外開するもので、深めの身をもつ。2・11・26・29が該当する。29の口縁端部は僅かな面を有し、沈線が認められる。口径、器高ともに他よりひとまわり大きいので鉢とするべきかもしれない。杯Dは丸底の体部から稜を作って長めの口縁部が直立気味に開くもので、4・35が該当する。須恵器の杯蓋を反転させて模倣したものと考えられる。今回は杯Bの出土はない。なお、11は内面の色調が黒色を呈しており、黒色処理が行われた初期的な個体と考える。

高杯 6点を図化提示できた。全形を把握できたものは13の1点のみで、23・24は推定復元である。杯部が2段成形の高杯Aおよび高杯Cが主体となる。他に杯Bに似る杯部が1点あり(31)、既存の分類に該当しないが便宜的に高杯Dに含める。

高杯Aは4段成形のいわゆる屈折脚高杯で、23・24・25と脚部のみが6が該当する。杯部の形態は、24では杯部中位の稜より上が直線的に外開し、23は内湾気味になる。脚部は25をみると筒部がかなり短くなっている。高杯Cは13の1点のみである。2段成形の杯部に円錐形の脚部が組み合わさる。高杯Dには31の1点を該当させる。高杯Dは第11図の分類では杯A形の杯部をもつが、31はむしろ杯Bあるいは杯Dに似ている。ここでは杯に似せた杯部をもつという点で高杯Dの一種と理解したい。

埴(小形壺C) 全形がわかる5点(14・15・16・17・32)と一部のみ2点(5・19)の計7点を図化提示できた。丸底でやや扁平の球形を呈する胴部に、小さく締まってくびれた頸部から直線的またはやや内湾して開く口縁部が付される特徴的な形態をもち、最大径は胴部中位にある。器面調整はミガキを基調とするが、丸底化した時のケズリを磨き潰さずに残す個体もある(14・16・17)。14の底部中央には直径2cmほどの凹部が作られている。

この埴の形態は同時期の須恵器罍を模倣したものと考える。須恵器罍にみられる胴部の一孔や口縁部の稜などが埴には無いので、忠実な模倣という点では問題もあるが、大きさや扁平気味の胴部、口縁部の内湾形態は明らかに須恵器罍の影響を受けている。むしろ、須恵器罍の模倣品とみるより、その影響で新たに成立した土師器の器種と捉えるべきであろう。

壺 ほぼ全形がわかるものとして二重口縁をもつ大形壺A(34)と単純口縁の大形壺B(36)、丸底の小形壺A(22)、小形の無頸壺(33)の4点、また、破片資料として口縁頸部(21・27・28)、底部(20)の4点、合計8点を図化提示できた。

34の大形壺Aは口径14cm、推定器高18cmを測る小形品である。欠損のため底部の形状は不明だが、球形の胴部と「く」の字にくびれる頸部、中位で稜をもって2段に外反する口縁部など壺Aの特徴を備えている。

口縁部の稜は外面が直角に近く角張るのに対し、内面はわずかにくぼむ程度しかない。36は口径16.2、底径7.4、器高29.8cmを測る中形品で、平底をもつ点や胴部最大径26.5cmに対して頸部径が13.1cmと狭い点、煤や炭化物付着の使用痕がない点から、本稿では大形壺Bに含まれるものと考えた。ただし、器面調整がハケメを基本としてミガキがみられないことから甕に分類することもできよう。22は丸底で球形の胴部から直線的に口縁部が開く形態を呈し、直口壺（小形壺A）の一種と推定される。ただし、外面の調整にミガキが行われず、ハケメを残している。33は口径5.3cm、器高5.7cm、胴部最大径9.1cmを測る小形の無頸壺の完形品である。小型丸底壺の口縁部を取り除いた胴部のみの形状に類似する。内湾する口縁の端部はヨコナデによってわずかに上方へつまみ出されている。21・27・28は短く立ち上がる口縁部で、小形の壺の一部と推定できる。いずれも口縁部内外面にミガキが施されている。

小形甕 7・9・30の3点を該当させる。いずれも平底で、最大径が胴部に位置し口径もこれに匹敵する。ただし、9は器高を口径が上回り、内外器面にミガキが施されて杯Cにも近似する。

須恵器蓋杯 3の1点のみである。形態は土釜形を呈し、口縁端部内面がわずかに面取り気味となっている。器面調整は、全面をロクロナデされるが、内面は不定方向のナデ、外面底部は丁寧な手持ちケズリが行われている。

②土器群

各土器集中遺構から出土した土器は、いずれも出土状況からみて廃棄の同時性を有する一括遺物と考えられ、組成や組合せによる編年的位置を探るのには非常に有効である。また、土器群ごとに器種組成がまったく異なり、同様な遺構（土器集中）でありながら際立った対比をみせているのも大きな特徴である。代表的な土器群について組成の特徴や編年上の位置について検討してみたい。

土器集中2出土土器群 杯D（4）と須恵器蓋杯（3）が重なるように出土しており、この2個体は廃棄の同時性を完全に有する土器群と認定できる。杯Dは前述のとおり須恵器杯蓋を上下を反転して模倣したもので、これと本来の須恵器蓋杯が組み合わさって出土したことは、当該遺構の性格を探る上で注目に値しよう。ただし、3の須恵器蓋杯は編年的にはTK73窯式に相当し、これに比せられる同窯式の須恵器蓋の形態は杯Dとは異なる。むしろ4の杯DはTK208窯式以降の須恵器蓋杯を模倣していると考えられ、その時期的なズレをどのように理解するかが課題となろう。

土器集中9出土土器群 杯A（10・12）、杯C（11）、高杯C（13）、埴（14～17）の8点がまとまって出土し、廃棄の同時性をもつ土器群と認定できる。特に高杯と埴は遺存状態がよく、非常に良好な土器のセットといえよう。本土器群の特徴は8点中4点を埴が占めていることである。この偏った器種組成は本土器群が埴を中心とした用いられ方をしていた事実を示すが、この器種は須恵器碌を模して成立した器種であり、同時期の古墳周溝内祭祀でも須恵器碌と互換的に使われている点から、きわめて祭祀的な傾向を有すと考えたい。編年上でも埴は第13図の編年表4段階に特徴的に現れており、本土器群の時間的な位置を限定する良好な資料となる。

土器集中11出土土器群 高杯Aばかり3点を図化提示している（23～25）。いずれも欠損部が多く図上復元であるが、出土状況から推定して完形品に近いものが3点同時に正位に置かれ、杯・脚などの接合部から折損、剥離していったものと考えられる。杯部に杯や・などを載せない高杯のみの構成は珍しいが、土器ではない有機物が載せられていた可能性もあろう。祭祀的な傾向の強い土器群といえる。編年的には24の杯部にみる段下部分の発達や23の杯部上半の内湾気味の開き、25の脚部上半の短小化などは、いずれも高杯Aの型式変化を示し、第12図の編年表4段階およびそれ以降に比定できる。

③松本盆地の古墳時代中期土器編年と出川西遺跡Ⅵ出土土器の位置

第12・13図は松本盆地における古墳時代中期を中心とした土器編年表(案)である。これは高杯A(屈折脚高杯)の消長と型式変化を基軸に6段階に区分したもので、1段階が4世紀後半～末、6段階が5世紀末から6世紀初頭、2～5段階が5世紀に相当すると考えている。

1段階は高杯Aの出現期で、杯部は稜から上の方が大きく、やや外反するのが形態的特徴である。脚部はよい資料を欠いているが、脚筒部がかなり円柱形に近いものと想定する。器種組成は、まだ前期的な高杯や小型丸底鉢、小型器台などが伴っている。小型丸底壺(小形壺B)も現れる。壺や甕の詳細は把握できていない。本段階には松本市岡田町0032住、白神場2住、向畑1住が相当する。

2段階は前期的な様相がほとんど払拭される時期で、高杯Aと小型丸底壺(小形壺B)で構成される。高杯Aの形態は、杯部の稜より下部が前段階に比べてやや広くなり、脚は筒部が円錐形状を増す。杯部の形態は高杯Aと同じだが、脚部が円錐形を呈す高杯Cが出現する。一方で前期的な直口壺(小形壺A)が残存している。口縁部が直立する中期的な二重口縁壺(大形壺A)や、低部をケズリで丸くした甕A・甕Bが確実に出現している。ごく稀に高杯などに内面黒色技法が認められるが、丁寧なミガキを伴わず、定型化したものではない。本段階は松本市堀の内81・101住、鎌田2住、白神場12住が相当する。

3段階は杯が出現し小型丸底壺(小形壺B)と共存する時期である。高杯Aの形態は前段階とほとんど同じだが、杯部稜下の発達と脚筒部の円錐形状化が微妙に進行し、脚筒部にわずかな膨らみを感じさせるものも現れる。杯は口縁端部がわずかに外反する杯A、頸部が括れる杯C、口縁端部が単純に収まる杯Bが揃って現れている。杯Aはまだ内斜口縁を採用していない。杯Aあるいは杯Cを載せたような高杯Dも出現する。罎(小形壺D)や、甕形の大形甕も確認されている。内面黒色技法は前段階と同様の状況である。松本市高宮土器集中・1住、山影30・32・33・37・44住が相当する。

4段階は杯と高杯が主体となり、小型丸底壺(小形壺B)が消滅した時期である。高杯Aは脚筒部の短脚化が始まり、杯部上半の外反はなくなる。杯Aには内斜口縁が現れ、高杯Bが確実に伴う。罎(小形壺C)は本段階を中心に存在する。須恵器の伴出が確認され始めるが、窯式はTK73からTK208までのものがあり、伝世品を想定する必要がある。内面黒色技法は前段階と同様の状況で、非常に稀にしかみられない。本段階には松本市11・18住、向畑11・12号古墳が相当する。

5段階は高杯Aの短脚化が進行し、脚部の稜が不明確になって高杯Cや高杯Bの円錐脚と区別がつかないものも現れる時期である。把手付の大形甕の存在が確認されている。内面黒色技法が杯に散見できるようになる。ミガキを伴っており、この段階で定着が始まったと考える。本段階には塩尻市中挟1・18住、松本市県町64・71住、大町市中城原3号古墳周溝が相当する。

6段階は高杯Aの短脚化がさらに進行し、この段階を最後に消滅する。杯Aも内斜口縁を含めてほとんどみられなくなり、口縁部の拡大した杯Cが主体となる。須恵器の高杯を模した高杯Eや高杯Fが確実に伴ってくる。壺や甕については良好な資料が得られていない。古墳時代中期的な土器様相がこの段階で失われていくと考えたい。須恵器はTK23～TK47窯式のものに伴う。内面黒色技法が杯や高杯に頻繁に施され、この段階で普遍化する。本段階には松本市平田里1号古墳周溝、大町市中城原6号古墳周溝が相当する。

今回の出川西遺跡6次調査出土品の時期は、良好な土器群として捉えた土器集中9が4段階、土器集中11が4段階およびそれ以降に比定できており、その他の土器を含めてもほぼ4段階に相当すると考えるのが妥当とみる。内斜口縁の杯Aの存在や罎(小形壺C)の盛行、小形丸底壺(小形壺B)の不在、内面黒色技法の普遍化以前、などの特徴を考慮した結果である。また、これまで当地域で位置付けが不明であった杯Dが今回の土器群に伴ったことにより、4段階から存在する可能性が高まったことを指摘したい。

(2) 土製品 (図版18)

土器集中7からは20点以上の土製品が出土した。これらの多くは細片化しているためほとんど接合できず、その全体像を把握できなかったため図化提示はしていない。胎土や焼成、形状も非常によく似たものばかりのため、その個体数すら明確にできない状況にある。

まず胎土・色調であるが、基本的には土器集中地点から出土している古墳時代の土師器杯・高杯・罎などと同様、きめ細かく精製され橙褐色～茶褐色を呈する。形態的には棒状を呈するものと円筒形か何か器物の一部のような破片がみられる。

前者の、棒状を呈するものは直径1.5～2.8cmほどで、粘土塊を紐状にのぼし、表面をなでたり押さえたりしただけのもので、うち1点には数カ所に枝状の突起が付されている。他の細めのものには端部をただ丸めただけのものがみられる。

円筒ないし器物状を呈するものうちある程度残存のよいものをみると直径4cm内外の筒状を呈し、端部を少し外反させている。内外の整形は雑で、ナデや押さえを行っている。端部の処理も雑で、ヨコナデは行われていない。また粘土紐の積み上げ痕が残り、接合部で破損したものがある。

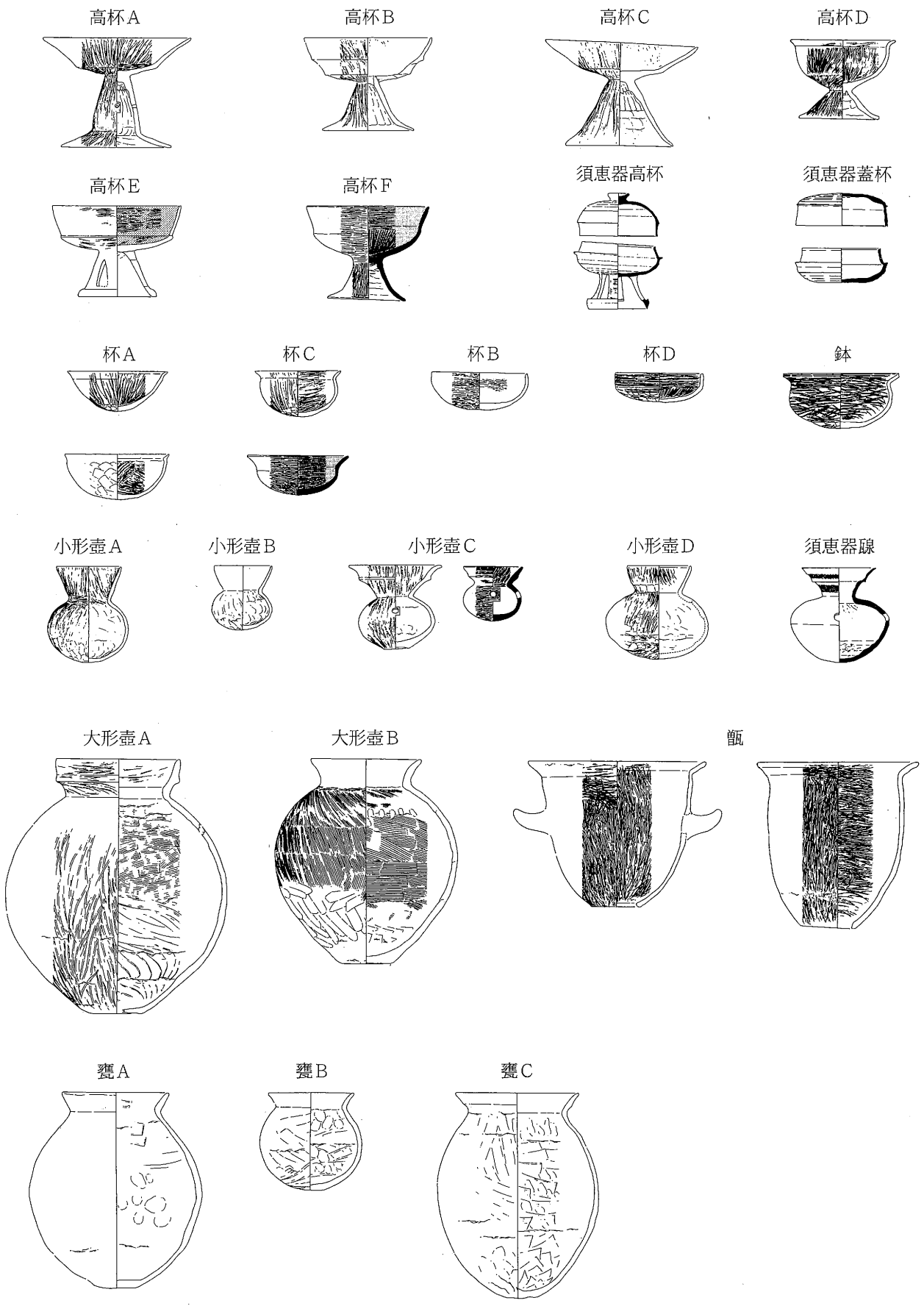
その他、何らかの形態の表面に貼付されていたものが剥離したと考えられる断片が数点ある。これらも表面の調整は雑で、押さえによる凹凸が目立っている。

これらの特徴からみる限り土器や他の実用的な器具ではありえず、形態の特徴から何らかの器材の模造品の断片ではないかと思われる。そして粗雑な成整形の模造品という観点から時期的・地理的に近接する類例を強いて挙げるならば、隣接する出川南遺跡内に所在する平田里1号墳の周溝から出土した粗雑な整形の形象埴輪がある。埴輪と土製品という大きな相違があるが、粗雑な技法で器物を模している点に共通する要素もあり、一応関連資料として挙げておきたい。

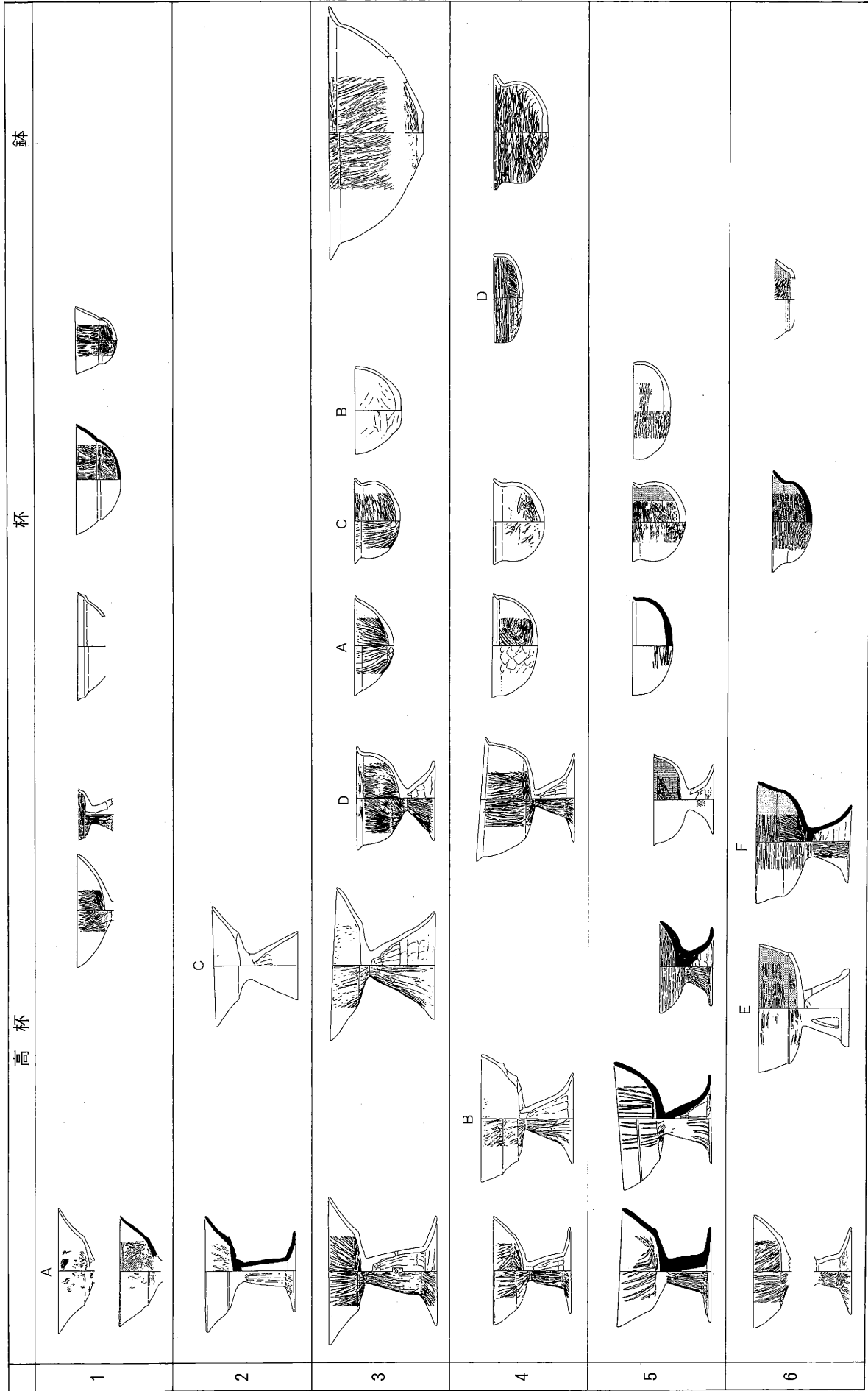
(3) 金属製品 (第15図、図版19)

鉄製品、銅製品それぞれ4点ずつが出土している。鉄製品には鎌・鏃・その他がある。鎌(1)は配石4から出土した完形品で、身部長10cm、基部幅2.4cmを測る。基部から刃部にかけてはあまり幅を減ずることなく移行し、刃部先端は緩く湾曲する。刃部の柄部に対する角度は67°を、また基部の柄部に対する角度はほぼ直角である。基部の端は全体を直角に折り返している。鏃(3)は土集13から出土したもので、柳葉形を呈するものである。身部長1.7cm、最大幅はほぼ中央にあり1.1cmを測る。断面形は平造りである。筥被部は長さ6.0cmを測り、断面長方形を呈する。茎部は先端を欠損する。その他、土集7から楔状(5)および弧状の板状(4)を呈する鉄製品が出土している。それぞれ欠損品で全形は窺い知れない。これらの鉄製品はいずれも古墳時代中期に帰属するものである。

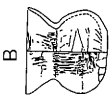

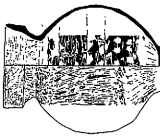


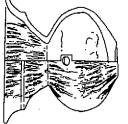
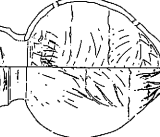
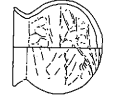
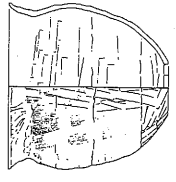
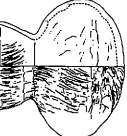
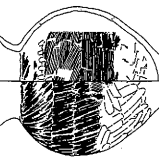

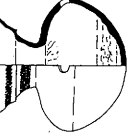

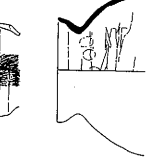
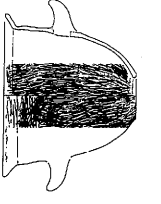
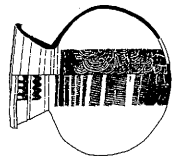
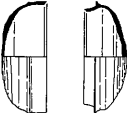
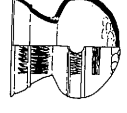
銅製品の内訳は銭3点・キセルの首部1点である。銭(図版19)は3点とも火葬墓からの出土品で、うち2点は被熱により溶着し、銭種の判読は不可能である。もう1点も熱により劣化が著しいが、永楽通寶の銭銘が判読できる。永楽通寶は初鑄が1408年で、火葬墓の帰属時期の上限を示している。キセルの首部(2)は調査区北東部の検出面からの出土である。全長6.8cmを測り、劣化が激しい。



第11図 松本平の古墳時代中期土器器種一覧



第12図 松本平の古墳時代中期土器編年(1)

	小形壺	大形壺	甗	須恵器
1				
2				
3				
4				
5				
6				

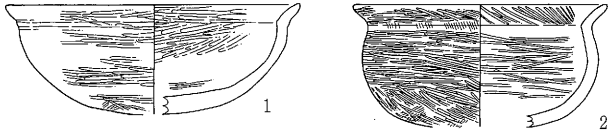
第13図 松本平の古墳時代中期土器編年(2)

第1表 出土古墳時代土器一覽

No	地点	器種	寸法 (cm)			残存度	紋様・調整		実測番号	注記	備考
			器高	口径	底径		外面	内面			
1	配石3	杯		(16.0)		口縁1/5 底部2/3	口縁ヨコナデ後横ミガキ、体部板ナデ後横ミガキ、頸部に凸帯	板ナデ後横ミガキ	配石3	出川Ⅲ 配石3 No.1	
2	配石3	杯?		(13.6)		口縁1/3 底部欠	口縁ヨコナデ、頸部ハケメ後ミガキ、体部ハケメ後横ミガキ	口縁斜・体部横ミガキ		出川Ⅲ 配石3 No.1	
3	土集2	杯	(4.6)	11.2	—	口縁3/4 底部2/3	口縁ヨコナデ・端部僅かに面取り気味、口縁ヨコナデ、底部丁寧なケズリ	不定方向ナデ	SI44EW0?	出川西VI SI44EW0 No.1	須恵器
4	土集2	杯	4.2	13.0	—	口縁7/8 底部一部欠	口縁ヨコナデ、口縁・体部横ミガキ摩擦、底部ケズリ後横ミガキ摩擦	上半横・下半縦ミガキ	SI44EW	出川西VI SI44EW	模倣杯
5	土集3	卍?			—	底部完	ケズリ後縦ミガキ	上部ケズリ、下部・底部板ナデ	SI44~147-1	出川VI SI44~147W3 No.1, SI44~147W6 No.4	
6	土集7	高杯			16.0	底部1/5	縦ミガキ	ナデ・板ナデ	SI59W3-1	出川VI SI59W3 No.3	
7	土集7	小形甕	12.6	11.3	5.7	口縁2/3 底部完	口縁頸部横ハケメ後ヨコナデ、胴部斜格子状ハケメ、胴下端ケズリ、底部ナデ	頸部横ハケメ後ヨコナデ、胴・底部板ナデ	SI59W3 SI62W3-1	出川西VI SI59~162W3 No.5・6	
8	土集8	杯	3.9	14.0	(4.0)	口縁1/2 底部3/4	口縁ヨコナデ、体部ナデ後ミガキ摩擦不明	板ナデ後横~斜ミガキ	SI53W6-1	出川西VI SI53W6 No.1	
9	土集8	小形甕	10.2	13.3	5.7	口縁3/4 底部完	口縁・頸部ヨコナデ後斜ミガキ、口縁端僅かに面、胴部僅か横ハケメ後斜ミガキ、底部ケズリ	口縁ヨコナデ後ミガキ、胴部工具ナデ後ミガキ	SI53W6-2	出川西VI SI53W6 No.3・4・5・6	
10	土集9	杯	5.0	12.3	—	口縁3/4 底部1/2	横ハケメ後ミガキ、底部に凹み	上半横・下半縦ハケメのちミガキ	SI50W6~9-1	出川西VI SI50W6~9 No.5・7	
11	土集9	杯			—	底部1/3	体部横ミガキ、底部ケズリ後ミガキ	横ミガキ (一部工具痕のこる)		出川西VI SI50W6~9	内面黒色処理
12	土集9	杯	(12.0)		—	口縁1/4	口縁ヨコナデ、横ミガキ	横ミガキ	SI50W6~9-6	出川西VI SI50W6~9、SI53W9 No.7	
13	土集9	高杯	12.7	16.3	12.0	口縁一部欠 底部5/6	口縁ヨコナデ、杯上部局部的にハケメ・ミガキ、杯下・脚部縦ミガキ、脚部ヨコナデ	杯・脚部斜ハケメ、脚上部絞り痕	SI50-1	出川西VI SI50W6~9 No.3	
14	土集9	卍	14.1	9.6	2.9	口縁完 底部完 (一部剥離)	口縁・頸部ヨコナデ後縦ミガキ、胴部斜~縦ミガキ、底部ケズリ	口縁ミガキ、頸部絞り痕、胴・底部工具ナデ	SI50W6~9-5	出川西VI SI50W6~9、SI53W9 No.7	二次焼成で底から口縁一部まで外面に泡立つような凹凸
15	土集9	卍	14.0	(8.8)	—	口縁一部欠 底部一部欠	口縁ヨコナデ後縦ミガキ、胴部斜ミガキ	頸部斜ミガキ、胴部ナデ	SI50W6~9-2	出川西VI SI50W6~9 No.6	
16	土集9	卍	15.1	9.8	—	口縁一部欠 底部一部欠	口縁ヨコナデ後縦ミガキ、胴上部ハケメ後ミガキ、底部ケズリ	口縁斜ミガキ、胴・底部板ナデ	SI50W6~9-4	出川西VI SI50W6~9 No.2	
17	土集9	卍	13.0	(8.4)	—	口縁1/4 底部完	口縁ヨコナデ後縦ミガキ、胴部斜ハケメ後縦ミガキ、底部弱いケズリ	頸・胴上部ナデ摩擦、胴・底部ハケメ後工具ナデ	SI50W6~9-3	出川西VI SI50W6~9	
18	土集10	杯		(12.8)	—	口縁1/8	口縁ヨコナデ、口縁・体部横~斜ミガキ	横ミガキ	土65-2	出川西VI 土65・7	
19	土集10	卍			—	胴上半1/3	ケズリ・板ナデ後縦ミガキ摩擦	工具ナデ	土65-1	出川西VI 土65・7	

No.	地点	器種	寸法 (cm)		残存度	紋様・調整		美測番号	注記	備考	
			器高	口径		外径	底径				外面
20	土集10	壺			底部4/5	板ナデ、底部ナデ	板ナデ	S147W9-1	出川VI S147W9		
21	土集10	壺	9.4		口縁1/5	口縁ヨコナデ、ミガキ	ミガキ	S144-2	出川西VI S144W9		
22	土集10	丸底壺	12.8	(13.0)	口縁1/4 胴2/3	口縁ヨコナデ、頸・胴部ハケメ摩滅	頸・胴部工具ナデ、底部指圧痕	土78-1	出川西VI 土78 No.1・フ	厚手、雑な作り	
23	土集11	高杯		(18.0)	口縁1/3 筒脚欠 底部1/4	口縁ヨコナデ、杯部縦ミガキ、脚端部ヨコナデ後縦ミガキ	杯部縦ミガキ、脚端内ナデ	S141-2	出川西VI S141W15 No.1		
24	土集11	高杯	(13.0)	18.4	ほぼ完	口縁ヨコナデ、杯部斜太いハケメ後横の疎らなミガキ、脚部縦ハケメ後縦ミガキ、脚端部縦ハケメ後疎らな縦ミガキ	杯部太い横～斜ハケメ後疎らな横ミガキ、筒脚部横のケズリ状の工具痕、脚端斜ハケメ	S141W18-1~3	出川西VI S141W18 No.1	3部分の復元美測。接点なし	
25	土集11	高杯			筒脚1/2	杯部縦ミガキ、筒脚部縦ミガキ摩滅、脚端部ハケメ後縦ミガキ	頸・脚部ハケメ後ナデ、筒脚部指押さえ絞り痕	S141-1	出川西VI S141W18 No.1		
26	土集12	杯	7.4	(12.0)	口縁1/3 底部1/2	口縁ヨコナデ、頸部縦・体部横ハケメ、底部手持ちケズリ	口縁縦ミガキ、頸部ケズリ、体部横ハケメ後ミガキ	S138W33-1	出川西VI S138W33 No.1		
27	土集13	壺		(14.0)	口縁1/12	口縁ヨコナデ、頸部以下ハケメ後ナデ・ミガキ	ナデ	S144~147-2	出川VI S144~147W84・トレンチ		
28	土集13	壺	11.5		口縁3/4	口縁ヨコナデ後斜ミガキ摩滅	口縁・頸上部ヨコナデ後斜ミガキ、頸部板ナデ	S147-3	出川VI S147W36 No.3		
29	土集14	杯	8.0	16.7	口縁5/6 底部完	口縁ヨコナデ、胴部ハケメ後横ミガキ、底部ケズリ後一部ミガキ、口縁端部に沈線を持つ面	ハケメ後横ミガキ	配石2003-1	出川III 配石1 No.1・2・4・5・検		
30	土集14	小形壺	15.1	13.0	口縁2/3 底部一部欠	口縁ヨコナデ、胴部縦ハケメ後ナデ摩滅、底部ナデ	胴部工具ナデ摩滅、底部ナデ	S150~153W33-1	出川西VI S150~153W33	成形、調整共に雑な作り。厚手	
31	土集15	高杯		13.2	口縁2/3 底部欠	口縁ヨコナデ、杯部横ハケメ後縦ミガキ	縦～斜ミガキ		出川III P17		
32	土集16	埴	14.1	8.5	口縁1/3 胴はぼ完 底部完	口縁ヨコナデ、胴部へラナデ後縦ミガキ、底部ケズリ後ミガキ	口縁縦ミガキ、胴部ナデ摩滅	溝2011-1	出川III 溝11 No.1	口縁内部黒色	
33	土集17	無頸壺	5.3	5.3	完存	口縁ヨコナデ、胴・底部工具ナデ	胴上部・下部・底部工具ナデ、中位ミガキ	土2011	出川III 土11		
34	土集18	壺		(14.0)	口縁1/3	口縁ヨコナデ後斜ミガキ、胴部縦ミガキ、胴下部ケズリ後縦ミガキ	頸部縦ミガキ、胴上部指圧痕、胴部工具ナデ		出川III 溝14		
35	グリット	杯		(14.0)	口縁1/5	口縁ヨコナデ、体下部ケズリ	口縁ヨコナデ・横ミガキ	S156E6-1	出川西VI S156E6		
36	試掘トレンチIT	甕	29.8	(16.2)	(7.4)	口縁1/8 胴1/2 底部完	口縁ヨコナデ、頸部横・胴上半斜～縦ハケメ(ケズリ状)、胴部下半ケズリ状工具ナデ、下部ナデ、底部やや上げ底・何らかの圧痕	口縁・頸部ヨコナデ、胴上部指押さえ・斜～横ハケメ、下部板ナデ・ハケメ、底部ナデ	TI住-1	出川西VI T1住	全体的に厚手で雑な作り

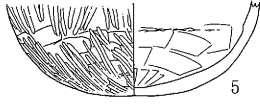
土器集中 1 (1・2)



土器集中 2 (3・4)



土器集中 3 (5)



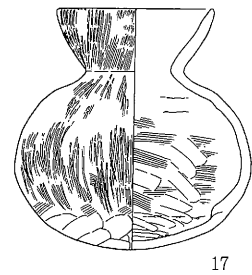
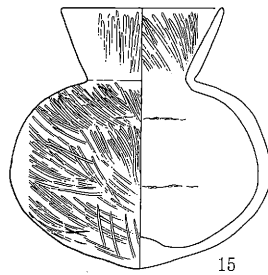
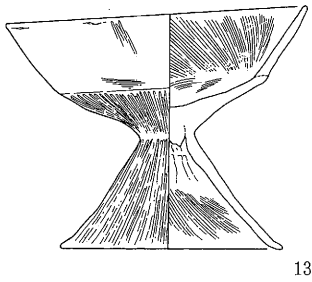
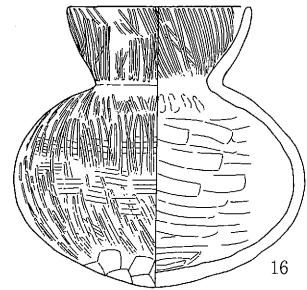
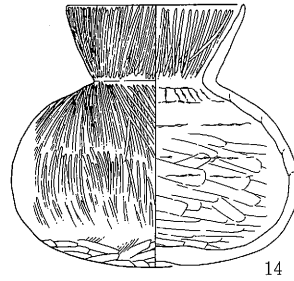
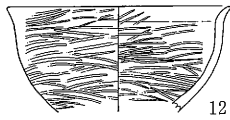
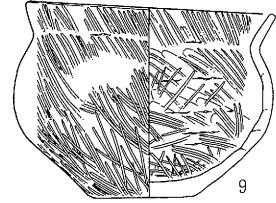
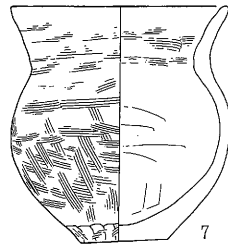
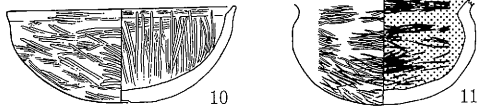
土器集中 7 (6・7)



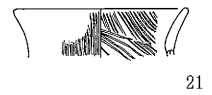
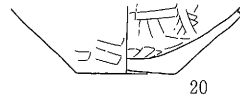
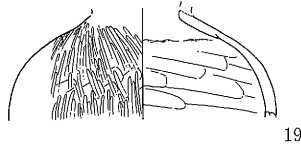
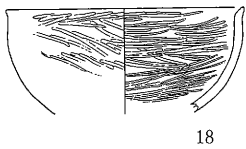
土器集中 8 (8・9)



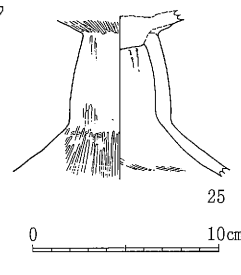
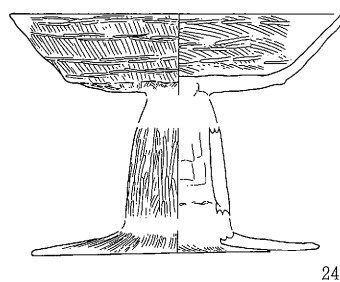
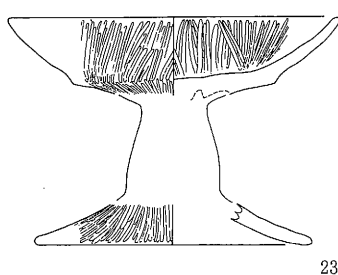
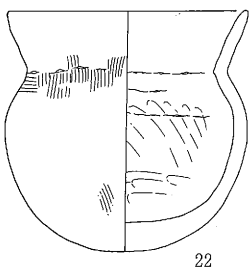
土器集中 9 (10~17)



土器集中 10 (18~22)

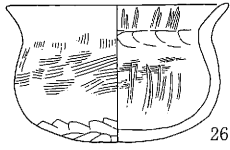


土器集中 11 (23~25)

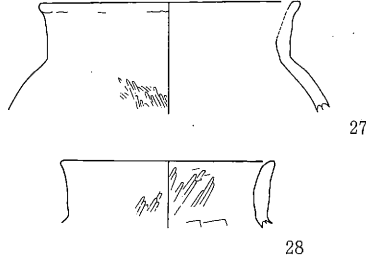


第14図 出土遺物 (1)

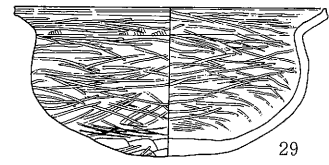
土器集中12 (26)



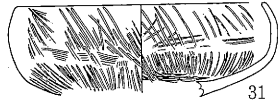
土器集中13 (27・28)



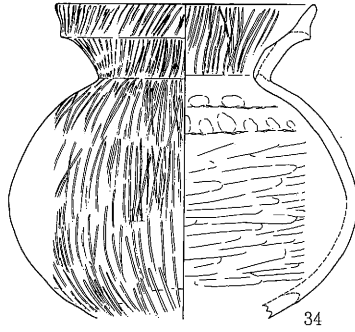
土器集中14 (29)



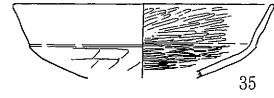
土器集中15 (31)



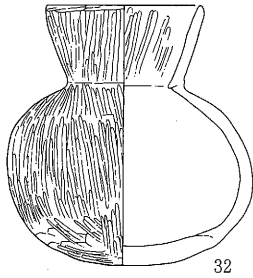
土器集中18 (34)



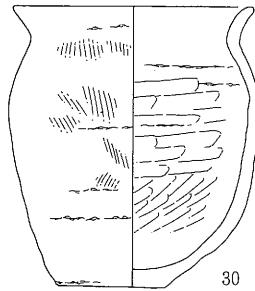
グリット (35)



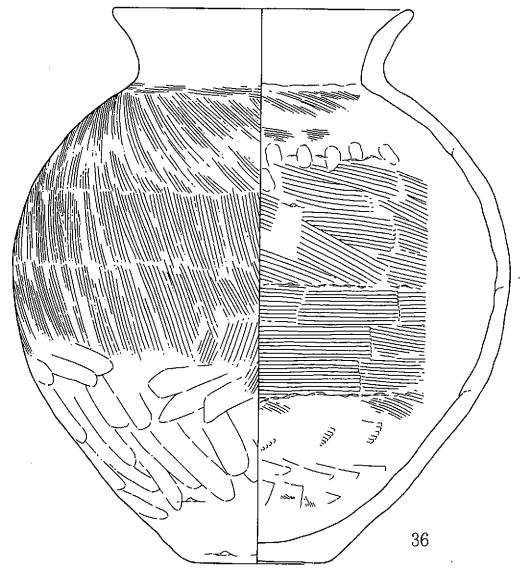
土器集中16 (32)



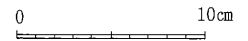
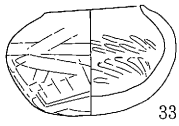
土器集中19 (30)



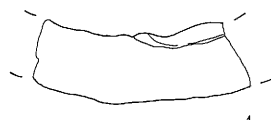
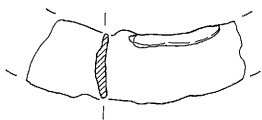
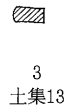
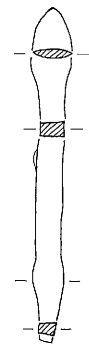
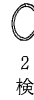
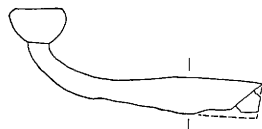
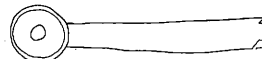
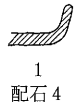
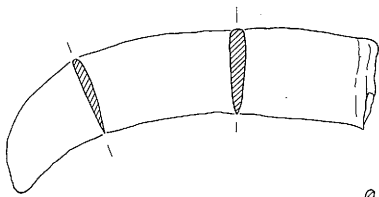
試掘 (36)



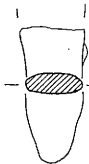
土器集中17 (33)



鉄製品



4 土集7



5 土集7



第15図 出土遺物 (2)

IV まとめ

今回の調査では古墳時代中期の集落址の検出が予想された。しかし6,000㎡以上に及ぶ調査の結果からは当初予想に反して遺構・遺物の分布が希薄で、住居址などの発見には至らなかった。代わって調査区南部から遺物の集中地点（土器集中地点）が14カ所で検出された。その北側には平成5年の調査区があり、組合式石棺状の配石遺構4基、土器の単独出土地点（便宜上土器集中地点と呼称）5カ所があった。これらは通常調査の対象となりにくい集落外で見出されたものであるため現時点では類例に乏しく、その性格は判然としない。本調査のまとめとして、これらの遺構について整理し、今後の検討課題としたい。

配石遺構について 平成5年調査区内の4基について、これらは人骨や副葬品の出土がまったくないこと（配石4からは鉄鎌が1点出土しているが内部空間からの出土ではない）、この種の石棺墓が古墳の内部や古墳群など墓域以外の領域から単独の埋葬施設として検出された例をあまり知らないことなどの理由から墓址として積極的に断定できず、今回は配石遺構と呼称するにとどめた。

組合式石棺状を呈するこれら4基のなかにも石材の組み方や平面形態に二者が存在した。一方は舟形を呈するもので、他方は長方形の箱形となるものである。両者とも土床とすることや、蓋石の被せ方に一致した特徴が認められる。規模的には底面の長さが60～80cmほどで小形の箱形石棺にも通じる値である。また小口幅が片側で大きくその側で床面が高まるものがあり、頭位を意識した石棺的な様相とも受け取れる。主軸方向は配石4を除き先端部が北西～北東方向を向き、一応北方向が意識されているようである。

しかし今回配石遺構群の周辺を調査したが新たな遺構を見出すことはできず、4基のみの群であることが判明した。また周囲に墓址的な土坑や古墳などがまったくなく、一帯がおおよそ墓域としては捉えられないことなどの点がこの遺構を墓址として積極的に評価できない理由である。

一方で周辺に住居址などの居住施設もまったくなく、これらの遺構が日常生活にかかわる施設ではないことも明らかである。配石遺構周囲や南東側には土器集中地点の一群が存在しており、遺構の性格を考える上でそれらとの関係も考慮する必要がある。

土器集中地点について 調査成果でも触れたように帯状の凹地状地形の底面や縁に沿って完形の土師器・須恵器が単独、あるいは1～10数個体まとめて出土する地点が19カ所で捉えられた。これらを構成する土器には杯、高杯、壺（埴）類など小形の精製品と小形甕があるが、大形の土器類はあまりみられない。また群によっては器種の選択が行われ高杯のみで構成されていたり、あるいは鉄製品や模造品的な土製品が伴っていたりする。出土状況からこれらの原位置を復原すると多くが凹地状地形の縁に並んでいたり底面に置かれていたと思われ、単なる廃棄ではなく意図的に置き去られたものと推察される。

遺構の性格についてはこれらが居住域から離れたところに存在し、土製品や鉄製品を伴うものもあることから何らかの祭祀的な性格を有していると考えておきたい。わずかな類例を求めれば、群馬県の黒井峯遺跡において道路遺構の交差点に玉類や破碎された土器が置かれる例があるが、本例がそれと同じ意味をもつのかはわからない。ところで本遺跡の北側に展開する古墳時代中期の高宮遺跡では集落の西側縁辺部、低湿地に臨んで大小の祭祀遺構が分布し、本調査地から高宮遺跡にかけての微高地西縁部一帯が、該期においては祭祀にかかわる特別な空間として認識され、居住域とは区別されていた可能性もあり、今後広範な調査の積み重ねにより究明をしていかななくてはならない課題である。

最後に本調査に際してお世話になった（株）イトーヨーカ堂・松電商事（株）の関係者の皆様、調査にご協力頂いた地元の皆様に感謝の意を表して本書のしめくくりとしたい。

付 編

1. 出川西遺跡放射性炭素年代測定結果報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

出川西遺跡は、松本市南部を流れる田川左岸の微高地上に位置する。発掘調査によって検出された土坑は、出土した渡来銭などから、中世の火葬墓と考えられている。ここでは、土坑覆土より出土した炭化材の放射性炭素年代を測定することにより、その年代を検討する。

(1) 試 料

試料は、中世火葬墓の覆土より採取された炭化材1点である。試料名は、火葬墓No.1出土炭化材である。

(2) 分析方法

①前処理

乾燥、粉碎したものを水に入れて、浮上してきたものを除去した。次に水酸化ナトリウム溶液で煮沸した。室温まで冷却した後、水酸化ナトリウム溶液を傾斜法で除去した。この作業を、除去した水酸化ナトリウム溶液の色が薄い褐色になるまで繰り返した。次に濃硝酸を加えて煮沸した。室温まで冷却した後、傾斜法により除去した。充分水で洗浄した後、乾燥して蒸し焼き（無酸素状態で4℃に加熱）にした。蒸し焼きにした試料は醇酸素中で燃焼して二酸化炭素を発生させた。発生した二酸化炭素は補集後、純粋な炭酸カルシウムとして回収した。

②測定試料の調製

前処理で得られた炭酸カルシウムから真空状態で二酸化炭素、アセチレン、ベンゼンの順に合成した。最終的に得られた合成ベンゼン3ml（足りない場合は、市販の特級ベンゼンを足して3mlとした）にシンチレーターを含むベンゼン2mlを加えたものを測定試料とした。

③測 定

測定は、液体シンチレーションカウンターにより、1回の測定時間50分間を20回繰り返し計1,000分間行った。未知試料の他に、値が知られているスタンダード試料と自然係数を測定するブランク試料を一緒に測定した。

④計 算

放射性炭素の半減期として、LIBBYの半減期5.570年を使用した。

(3) 分析結果

測定結果を表に示す。

第2表 放射性炭素年代測定結果

試 料		年代値 (年前)	誤 差		Lab No.
試 料 名	性 状		+	-	
火葬墓No.1出土炭化材	炭化材	490	290	280	PAL-221

注 (1) 年代値: 1,950年を基点とした値。

(2) 誤差: 測定誤差 2σ (測定値の95%が入る範囲)を年代値に換算した値。

(3) PAL: パリノ・サーヴェイ(株)で測定。

(4) 考 察

今回の年代値をそのまま暦年に直すと A. D. 1,460年であり、室町時代の中頃に相当する。したがって土坑の年代はほぼ室町時代のものである可能性が高い。ただし、より詳細な年代の特定にはより多くの年代資料を得るなどの検討が必要であろう。

また、暦年代と測定年代のずれも考慮しなければならない。これは、よく知られていることであるが、過去の大気中のCO₂における14Cの濃度が現在のそれとは同一でないことや、年代測定の計算に用いられている半減期の年代が、その後の実験により実際の半減期とは2%ほど異なっていることなどの理由により、測定年代と暦年代は必ずしも一致しない。暦年代への補正は、年輪年代のわかっている樹木について年輪毎の放射性炭素年代を測り、暦年代と測定年代とを対応させた曲線を用いることによって行われるが、現在はまだ様々な曲線が存在し、多くの問題点も含んでいる。したがって、ここでは特に補正は行わないが、今後の暦年代補正の研究の進展によっては、本測定値の評価も変わる可能性がある。

2. 出川西遺跡の既出資料について

はじめに

出川西遺跡ではこれまでに数多くの表面採集資料や調査資料がえられている。なかでも本報告第6次調査地点の東約400m、日穀製粉の敷地内において平成5年に行われた立会い調査（出川西Ⅱ）の出土資料は土器・石器ともに弥生時代中期後半の単独住居址からの出土資料として良好な内容を有しており、付編としてここに紹介しておきたい。

資料の提示の前に調査所見について簡単に触れておく。経過としては工場建設による工事立会い時に遺構・遺物が検出されたため60㎡ほどが面的に調査されるに至ったものである。その結果、弥生時代中期後半の住居址1棟と土坑2基、古墳時代の溝状遺構1条が検出された（図版19）。住居址は全体を露出するまでには至らなかったが、一辺5m以上の長方形を呈し、周溝と柱穴を有するものである。黒色の覆土中からはおびただしい量の土器片が出土したがそのほとんどが破片で接合・復原できるものではなかった。しかし土器群に混じって同一レベルから横位に潰れた完形の甕が1点のみ出土した（図版19）。調査時には明確に認識されていないが、周囲の土器片とは状況が異なっており、土器棺墓など別遺構の可能性もある。

(1) 土器（第3表、第16～18図）

住居址及び周辺の検出面と土坑内から多量の弥生土器とごく僅かな古墳時代の土師器が出土している。総量は整理用コンテナ4箱で、調査面積に比して多い。小片まで図化提示に努め、75点を図示した。

①弥生土器

弥生土器は時期的には中期中葉（第16図1・2）と中期後半～末（第16～18図3～74）の2時期が認められる。前者は土坑4に、また後者は第6号住居址に伴うもので、検出面からの出土品もこの二つの時期に限られるため、双方の遺構に関連するものであろう。数量的には中期中葉のものはごく少量で、中期後半～末が大半を占める。したがって、以下では大半を占める中期後半～末のものを中心に記述を進める。

i) 器種・器形

器種は大別して壺、甕、台付甕、高杯、鉢があるが、その中にも若干の器形の差異がみられる。各器種ごとに検討したい。

壺 3～14・65・73が相当する。全形を知り得るものはないが、口縁部形態で分類すると、単純に外反する壺口縁A（4・5）と端部が僅かに受け口になる壺口縁B（3・6）の2者が認められる。頸部・胴部破片の中には、頸部で径が細まり、その上端で僅かにくびれの稜を有して口縁部が開く形態を採るものがみられる（7・8・12）。

甕 15～52・66～69が相当する。口径が30cmを超える大形のものから、10cm以下の小形品までさまざまな大きさがある。全形がわかるものが少ないので、小形品には台付甕が含まれてしまっている可能性がある。口縁部形態に着目して分類すると、短く外反する甕A（15・17～21・30～34・39・44・46・47・49・66・67）、受け口になる甕B（16・29・40～43・68）、受け口が有段に近くなる甕C（22～28）の3者が認められる。

中期中葉に属する1・2も器種はおそらく甕になると推定する。

台付甕 53～56・71・74が相当する。70は台部が失われているが、紋様構成から推定して台付甕の可能性はある。また、甕として扱った中にも17・18など小形で胴が丸く下すばまりになっていくものは、台付甕の可能性が高い。

高杯 57～61が相当すると考える。いずれも破片で全形を判別できるものはない。57～60の脚部は台付甕の脚部と識別が難しいが、赤彩のあるもの（58）、胴部内面の器面調整がミガキや丁寧なものを高杯とした。61は破片で、大形の壺の口縁部かとも思われたが、口縁端部に施紋や加工がみられないので、あえて高杯に分類した。

鉢 62・63が相当する。内外面が丁寧に磨かれ、赤彩が行われる。64は底面に一孔を有する有孔鉢で、甌とも称される。鉢とは異なり、ミガキや赤彩は行われない。

ii) 紋様

各器種の器面を飾る紋様は、施紋原体で大別すると条痕紋、櫛描紋、篋描紋、縄紋、及び赤彩があり、それぞれに器種と部位によって多様なあり方をしている。

条痕紋 櫛描原体よりも太く、しかも不揃いな繊維質の原体を束ねたもので複数の平行線を描いている。中期中葉の甕（1・2）にのみ認められ、中期後半以降の土器にはない。

櫛描紋 直径1mm前後の円柱形の棒を数本束ねて施紋される。壺、甕にもっとも普遍的にみられる紋様で、さらに波状紋、簾状紋、条線紋などに分類される。

波状紋は甕A・Bの胴部（15～18・21・35・37）や甕Bの口縁部（16・43）、壺口縁B（65）に横帯で巡らされ、稀に甕Aの頸部に簾状紋の代替のように存在する（20・43・45）。また、一部の壺の頸部紋様（10・12）や懸垂横帯紋の懸垂内部の充填紋様（12）としても施紋されている。甕A・Bの胴部紋様として最も一般的な紋様である。

簾状紋はすべてが甕の頸部を一段の単独で巡っており、このような限定された施紋方法に特徴がある（28～42・46・47・66・67）。すべて等間隔止めで、多連止めはまだ認められない。

条線紋は甕の胴部に施紋され、さらに斜走条線（19・42・44・45）、縦羽状条線（30・33・36・38～41・43）、横羽状条線（20）に細分できる。条線紋のなかでは縦羽状条線が最も多く、波状紋と並んで甕A・Bの胴部紋様として多用されている。

篋描紋 幅2～5mmほどの篋描沈線で構成される紋様である。沈線の断面形が半円状を呈すので、実際の施紋原体は半截または多截の竹管凸面を用いていると推定する。篋描紋の描き方や組み合わせによって、さらに横線紋、山形紋、鋸歯紋、懸垂紋などに分類できる。

横線紋は壺の頸部紋様帯を横帯に区画するのに用いられている、補助的な紋様である。上下に間隔を空けて2段以上重ねられ、その間に縄紋（9・11）や櫛描波状紋（10・12）が描かれている。ただし、10・12の櫛描波状紋は横線紋の施紋以前に描かれており、それを横線紋が切る形となっている。

山形紋は甕Cの口縁部および一部の壺口縁Bに特徴的にみられ、縄紋地紋の上に単段（23・25～27）または2段（24・28）で横の山形が描かれている。

鋸歯紋は篋描沈線で大きな山形を描き、その内部に縦横線や斜線を充填するもので、複合鋸歯紋となったものが台付甕の胴部に1点みられる（70）。

懸垂紋では垂下線や区画を描く際に篋描沈線が使われている。内部には櫛描波状紋などが充填されるため篋描沈線は区画を作るための補助的な存在といえよう。

刻み、刺突 甕の口唇部を中心に篋や櫛で刻み、刺突の施紋が僅かではあるが行われている。29の甕口唇部上面には、おそらく胴部を施紋している櫛描原体と同様のもので刺突が行われている。刺突は土器のカーブよりも若干傾けて、斜めに複数列が並ぶようにしている。46・66・67の口唇部には篋描原体による刻みがあり、66・67がやや外側面なのに対し46は上面に行われる。

縄紋 壺と甕の口唇部および甕B・Cの口縁部に認められる。甕B・Cの口縁部紋様では、篋描山形紋の地紋として用いられるのが基本である。縄紋の撚りは単節L Rがほとんどで、甕B・Cの口縁部紋様は横方向の施紋、その他の口唇部施紋は口唇上面に土器のカーブに沿って転がしている。17の甕口唇部にのみ単節R Lの撚りが施紋されている。

赤彩 鉢の内外面（62・63）、高杯の脚部外面（58）、および一部ではあるが壺の胴部外面に認められる（12）。12の壺には懸垂横帯紋の懸垂施紋部間の無紋部分に赤彩が行われている。

iii) 編年的位置

今回報告した第6号住居址出土土器は、一括廃棄的な出土状態からみて、弥生時代中期後半～末の弥生土器資料として非常にまとまった良好な土器群である。中期後半～末という時間幅の中での、この土器群の編年的な位置付けはどうであろうか。従来、松本市周辺の弥生時代中期後半は百瀬式、あるいは栗林式に類似するものとして捉えられてきたが、近年の研究では県内北・東・中信の中期後半を3期区分することが主流となっており、当地域もその対象範囲の中に含まれる。そこで、第6号住居址出土土器群をこの3期区分の中にあてはめると、その第2期に相当させるのが妥当と考えたい。根拠は、甕の器形において外反口縁の甕Aや有段口縁の甕Cが甕Bを上回る量でみられることや、甕の胴部紋様において櫛描波状紋と櫛描条線紋の描かれる比率がほぼ半々であることなどを挙げることができよう。留意点は、僅かではあるが甕の胴部紋様に横羽状条線がみられること、同じく頸部に簾状紋に代わって波状紋が巡らされているものがあること、壺頸部紋様に櫛描波状紋が頻繁にみられること、などである。これらは前後の時期との連続性や、地域的な要素を検討する材料となろう。

②土師器

土師器は1点のみ図化提示できた（75）。器種は杯で、口縁部が短く外反屈曲する形態をとる。器面調整は内外面ともにミガキが施されている。時期は古墳時代中期に属すると推定する。本調査地点周辺の高宮遺跡や出川西遺跡の別次調査においても、古墳時代中期に属する遺構・遺物が多数発見されており、その点で今回の出土も理解できる。

(2) 石器（第4～6表、第19・20図）

はじめに

出川西遺跡Ⅱでは総点数122点、総重量約8747.8gを計る石器が出土した。そのうち第6号住居址石器群は約8割にあたる96点を占めるが、調査範囲の制約から第6号住居址のプランは不明である。ゆえに、遺構単位石器群としても、複数の遺構単位石器群により構成される構造総体としての出川西Ⅱ石器群としても、不明な部分が多々あることを明記した上で、各单位石器群について概観しておきたい^(註1)。なお、土器群の

所見からはこれらの遺構の帰属時期は、第6号住居址及び、それに切られる第3号土坑が弥生時代中期末、第4号土坑が弥生時代中期前半と推定されている。

①第6号住居址石器群^(註2)

緻密石材素材剥離系 狭義の石器としては鏃形石器3点(未製品1点)、錐形石器1点のほか、二次加工ある剥片6点、微細剥離痕ある剥片16点が認められた。素材獲得段階の資料としては石核3点、剥片11点、楔状石核7点、楔状剥片3点が認められた。石材は黒耀石が主体をなし、次いでチャート、そして1点のみであるが珪質泥岩も認められた。接合関係は認められず、同一母岩関係は黒耀石5母岩14点、チャート2母岩4点を確認し得たに過ぎない。

素質石材素材剥離系 狭義の石器としては、打製斧形石器1点及び、二次加工ある剥片1点が認められた。素材獲得段階の資料としては石核2点、剥片2点が認められたのみである。凝灰岩製石核1点を除いて石材はすべてホルンフェルスが用いられている。接合関係は認められず、同一母岩関係も1母岩2点を確認し得たに過ぎず、そのほとんどが単独資料である。

素質石材素材敲打・研磨系 狭義の石器としては、礫石器類7点、錘状石器1点、有孔石製品1点が認められた。その他本系統の素材も含まれている可能性もある、礫19点、礫片6点も認められた。全体的傾向として石材は、砂岩及び礫質砂岩が主体をなし、チャート、粘板岩、珪岩もわずかに認められた。接合関係は認められなかった。同一母岩関係は、第6号住居址に切られる第3号土坑石器群構成個体と遺構間同一母岩関係を持つ泥質凝灰岩製有孔石製品の1母岩2点を確認したに過ぎない。そのほとんどが単独資料である。

素質石材素材剥離・研磨系 狭義の石器としては、磨製鏃形石器4点(未製品3点)、磨製包丁形石器1点のほか、二次加工ある剥片2点が認められた。石材は千枚岩5点、結晶片岩1点が認められた。素材獲得段階の資料としては、千枚岩製剥片1点が認められたのみであることから、剥片状態での搬入も想定される。接合関係は認められなかったものの、同一母岩関係は千枚岩1母岩2点、第3号土坑石器群構成個体と遺構間同一母岩関係を持つ結晶片岩1母岩2点が認められた。

②第3号土坑石器群

千枚岩製剥片、チャート製二次加工ある剥片、結晶片岩製磨製鏃形石器、泥質凝灰岩製有孔石製品各1点より構成される。磨製鏃形石器が第6号住居址石器群構成個体と遺構間同一母岩関係を持つ以外は、単独資料である。

③第4号土坑石器群

千枚岩製磨製鏃形石器未製品、結晶片岩製楔状石核(磨製鏃形石器未製品とも考えられる)それぞれ1点より構成される。接合関係、同一母岩関係ともに全く認められない単独資料である。

④小結

石器群の母岩識別・接合作業から得られた遺構間の関係は、土器のそれと整合するものと考えられる。

<補註>

註1 明確な遺構より出土した一群の石器を遺構単位石器群と呼称し、資料操作の基本的単位とした。なお、本稿で用いた用語は拙稿(太田 1998)に準拠している。紙幅の制約等から提示し得なかった。参照頂きたい。

註2 基本的には緻密石材素材剥離系、素質石材素材剥離系、素質石材素材敲打・研磨系という三系統の石器製作技術システムが認められそうであるが、さらに磨製鏃形石器を主たる器種とする素質石材素材剥離・研磨系というシステムも仮設し得ると考えられる。

<引用・参考文献>

大工原 豊 1996 「(2) 石器」『考古学雑誌』第82巻第2号

太田 圭郁 1998 「②石器・石製品」『境窪遺跡・川西開田遺跡Ⅰ・Ⅱ緊急発掘調査報告書』松本市教育委員会

第3表 出川西遺跡Ⅱ出土土器一覽

No.	地点	器種	寸法 (cm)		残存度	紋様・調整		実測番号	注記	備考
			器高	口径 底径		外面	内面			
1	土4	甗	(25.2)		□縁1/8	□唇・□縁3本沈線4単位?、□縁ヨコナデ、□縁繩紋LR横、胴部縦条痕	ナデ	31	出川西Ⅱ土4	弥生中期前半
2	検	甗	(23.2)		□縁1/6	□縁ヨコナデ、縦~斜条痕紋	ナデ、一部ミガキ	30	出川西Ⅱ検	弥生中期前半
3	6住	壺	(15.2)		□縁1/10	□唇繩紋摩擦、□縁繩紋後山形沈線1条、ナデ摩擦	ナデ摩擦	52	出川西Ⅱベルト	
4	6住	壺	(13.8)		□縁1/6	□唇ヨコナデ、□縁板ナデ後縦ミガキ	摩擦不明	18	No.6	
5	6住	壺	(14.1)		□縁1/4	□唇繩紋LR、頸部ナデ摩擦	横ハケメ、一部繩紋	36	No.11	
6	6住	壺	(13.6)		□縁1/4	□唇繩紋LR、ハケメ後ナデ、端沈線	横ハケメ	40	出川西Ⅱ6住検	
7	6住	壺			頸部1/6	無紋部ミガキ、頸部繩紋LR横後刺突・山形沈線・貼付紋、粟圧痕	ナデ	38	出川西Ⅱ6住G14	外面種子(粟?)の圧痕
8	6住	壺			頸部1/2	ハケメ後ミガキ摩擦	板ナデ、ナデ	37	出川西Ⅱ6住No.27	
9	6住	壺			頸部2/3	頸部繩紋LR斜後区面沈線3本、胴部縦ミガキ	一部ハケメ状の工具ナデ	66	出川西Ⅱ6住検、G22	
10	6住	壺			頸部3/4	頸部~胴上部波状紋6段後頸部横区面沈線2本	ナデ摩擦	64	出川西Ⅱ6住G25	
11	6住	壺			頸部2/5	頸部繩紋LR横・沈線、胴部ナデ摩擦	ナデ摩擦	67	出川西Ⅱ6住	
12	6住	壺			頸部完	頸部上ナデ、頸部波状紋後横区面沈線5条、胴上半縞波状紋による懸垂5単位	ナデ摩擦	72	出川西Ⅱ6住G16	胴部懸垂紋間赤彩
13	6住	壺?		(5.4)	底部1/2	横ミガキ、底部ナデ	ナデ	32	出川西Ⅱ6住NE	
14	6住	広口壺?			胴部1/2	工具ナデ後横ミガキ	ミガキ状の工具ナデ	71	出川西Ⅱ6住No.3、9	
15	6住	甗	(9.4)		□縁1/6	□縁・頸部横ナデ、胴部波状紋	横ミガキ	53	出川西Ⅱ6住ベルト	
16	6住	甗	(11.4)		□縁1/4	□縁ヨコナデ、頸部以下波状紋	ナデ摩擦	68	出川西Ⅱ6住	
17	6住	甗	(13.1)		□縁1/3	□唇繩紋、頸部・胴部波状紋摩擦	ナデ摩擦、横ミガキ摩擦	70	出川西Ⅱ6住	
18	6住	甗	(12.8)		□縁1/3	□唇繩紋LR、□縁ヨコナデ、胴部波状紋	工具ナデ後やや太いミガキか	1	出川西Ⅱ6住No.22	外面炭化物付着
19	6住	甗	(16.0)		□縁1/8	□唇繩紋LR、頸部横ナデ、胴部条痕	横ミガキ	33	No.18	
20	6住	甗	(17.2)		□縁1/8	□唇繩紋、□縁ハケメ、頸部波状紋1条、胴部ハケメ後横羽状条痕	ハケメ後横ミガキ	7	出川西Ⅱ6住No.3	
21	6住	甗	(18.4)		□縁1/5	□唇繩紋LR横、□縁ヨコナデ、胴部波状紋	上半横・下半縦ミガキ	65	出川西Ⅱ6住No.11	
22	6住	甗	(11.4)		□縁1/6	□縁ヨコナデ、胴部横ケズリ	□縁・頸部ヨコナデ、胴部横ハケメ	19	NW	内面種子(粟?)圧痕
23	6住	甗	(12.4)		□縁1/8	□唇繩紋LR後山形沈線1条、頸部ナデ摩擦	横ミガキ	23	出川西Ⅱ6住ベルト	
24	6住	甗	(16.1)		□縁1/8	□唇ヨコナデ、□縁繩紋LR後山形沈線2条、頸部縞状紋、	ミガキ	35		
25	6住	甗	(16.8)		□縁1/10	□縁繩紋LR横後山形沈線、胴部条痕	横ミガキ	3	出川西Ⅱ6住	

No	地点	器種	寸法 (cm)		残存度	紋様・調整		実測番号	注記	備考
			器高	口径		外面	内面			
26	6住	甕		(18.6)	口縁1/12	口唇繩紋LR横、口縁繩紋LR横後山形沈線1条、胴部端描横線	口縁ハケメ、胴部横ミガキ	6	出川西II 6住G23	
27	6住	甕		(22.2)	口縁1/12	口唇ヨコナデ、口縁繩紋LR横後山形沈線1条、頸部ナデ	横ミガキ	12	出川西II 6住No9	
28	6住	甕		(25.6)	口縁1/12	口唇繩紋LR横、口縁繩紋LR横後山形沈線2条、頸部籬状紋	横ハケメ	10	出川西II 6住No33	
29	6住	甕		(16.4)	口縁1/8	口唇刺突、口縁ナデ、頸部籬状紋	ミガキ	26	出川西II 6住NW	
30	6住	甕		(15.6)	頸部1/6	口唇繩紋?、口縁ヨコナデ、頸部籬状紋、胴部縦羽状条痕	横ミガキ	11	出川西II 6住ベルト	
31	6住	甕		(10.4)	口縁1/12	口唇摩擦、頸部籬状紋、胴部波状紋摩擦	ミガキ摩擦	55	出川西II 6住No25E	
32	6住	甕		(15.4)	口縁1/6	口唇ヨコナデ、頸部籬状紋、胴部ナデ後波状紋	頸部板ナデ、胴部横ハケメ	13	出川西II 6住No28	
33	6住	甕		(13.6)	口縁1/10	口唇ヨコナデ、頸部籬状紋・縦羽状条痕	ナデ、ミガキ摩擦	27	出川西II No10	
34	6住	甕		(15.0)	口縁1/6	口唇ヨコナデ摩擦、頸部籬状紋、胴部波状紋	ミガキ摩擦	17	NE	
35	6住	甕			胴部1/3	頸部籬状紋、胴部波状紋	斜ハケメ後ミガキ	51	出川西II No16	
36	6住	甕			頸部1/6	頸部斜ハケメ後籬状紋、胴部縦羽状条痕	横ミガキ	16	出川西II 6住No18	
37	6住	甕			頸部1/6	頸部籬状紋、胴部ハケメ後波状紋	ハケメ後ミガキ	48	出川西II No31	
38	6住	甕			頸部1/3	頸部籬状紋、胴部斜ハケメ後縦羽状条痕	斜ハケメ後横ミガキ	62	出川西II 6住フ、ベルト	
39	6住	甕		(19.3)	口縁1/6	口唇摩擦不明、頸部籬状紋、胴部ハケメ後縦羽状条痕	ハケメ後横ミガキ	14	出川西II 6住G2	
40	6住	甕		(22.8)	口縁1/12	口唇ヨコナデ、頸部籬状紋、胴部斜条痕	ナデ摩擦	5	出川西II 6住G12	
41	6住	甕		(28.2)	口縁1/8	口唇繩紋、口縁ヨコナデ、頸部籬状紋、胴部縦羽状条痕	板状工具によるナデ・ハケメ後一部ミガキ	2	出川西II 6住G24	
42	6住	甕		(30.4)	口縁1/4	口唇ヨコナデ、頸上部ナデ、頸部籬状紋、胴部条痕	板ナデ	61	出川西II 6住	
43	6住	甕	36.0	26.3	口縁3/4 底部完	口縁、頸部波状紋右回り、胴上部斜ハケメ後縦羽状条痕6単位、下部ケズリ後ミガキ、底部ナデ	斜ハケメ後横ミガキ	75	出川西II	
44	6住	甕		(20.4)	口縁1/10	口唇繩紋、頸部端描横線1条、胴部板ナデ後縦～斜条痕	頸部板ナデ、胴部板ナデ後ミガキ	63	出川西II 6住G23	
45	6住	甕			頸部1/8	頸部波状紋、胴部ナデ後斜条痕	ハケメ後ミガキ	58	No.23	
46	6住	甕		(20.0)	口縁1/6	口唇ミガキ、口縁波状紋、頸部籬状紋	頸部上部ミガキ、頸部ナデ	20	NE	
47	6住	甕		(19.8)	口縁1/12	口唇繩紋摩擦、口縁波状紋、頸部籬状紋・一部波状紋	ミガキ摩擦	54	出川西II 6住No1	
48	6住	甕			胴部1/5	ハケメ	板ナデ後ミガキ	39	出川西II 6住検	
49	6住	甕		(15.0)	口縁1/4	口縁横ナデ、胴部ナデ	ハケメ後横ミガキ	69	出川西II 6住NE	
50	6住	甕		(12.6)	口縁1/4	口唇ヨコナデ、胴部工具ナデ	ナデ、一部ミガキ	4	出川西II 6住NE	
51	6住	甕		5.8	底部完	胴部一部ミガキ摩擦、底部ナデ	摩擦不明	24	出川西II 6住	

No.	地点	器種	寸法 (cm)		残存度	紋様・調整		実測番号	注記	備考
			器高	口径		外面	内面			
52	6住	甕		(5.8)	底部3/4	ケズリ、底部布目圧痕、	ナデ	47	出川西II 6住	
53	6住	台付甕			接合部完	ハケメ後ミガキ摩滅	細かい工具ナデ	50	出川西II 6住G17	胴部内面炭化物付着
54	6住	台付甕?		6.0	底部完	脚部ナデ	脚部ナデ、胴部ケズリ状の工具ナデ	15	出川西II 6住 Na.16	
55	6住	台付甕		(9.0)	底部1/4	工具ナデ、端部ヨコナデ	胴部ナデ、脚部ハケメ摩滅、上部に絞り痕	8	出川西II 6住 Na.20	
56	6住	台付甕?		(8.2)	底部1/3	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	21	出川西II 6住NE	
57	6住	高杯?		(6.2)	底部1/4	ミガキ、端部ヨコナデ	台部ナデ	9	出川西II 6住 Na.16	
58	6住	高杯?			接合部完	ミガキ摩滅	ハケメ、脚部・胴部ナデ	49	出川西II 6住棟	外面赤彩
59	6住	高杯		(4.8)	底部1/3	工具ナデ	ナデ	25	出川西II 6住G9	
60	6住	高杯?		4.9	底部完	脚部工具ナデ、端部ヨコナデ後面取り	ナデ	22	出川西II 6住G15NE	
61	6住	高杯?		(21.6)	口縁1/10	口縁ヨコナデ、ナデ・ハケメ	ミガキ摩滅	56	出川西II Nベルト	内外面赤彩、2孔穿孔
62	6住	鉢		(13.9)	口縁1/3	口縁ヨコナデ、体部横ミガキ、底部ナデ?	横ミガキ	59	出川西II 6住フ	内外面赤彩
63	6住	鉢		(20.6)	口縁1/3	口縁ヨコナデ、横ミガキ摩滅、突起貼付4単位	摩滅不明	60	出川西II 6住 Na.19	内外面赤彩
64	6住	甗		(5.6)	口縁1/10 底部1/2	口縁ヨコナデ、体部縦ハケメ後縦ミガキ・下端ケズリ、底部ナデ	板状工具によるナデ	34	出川西II 6住 Na.33	内外面に種子圧痕
65	検	壺?		(14.4)	口縁1/8	口縁波状紋・ナデ摩滅	ナデ摩滅	43	出川西II 検	
66	検	甕		(12.6)	口縁1/8	口唇窪キザミ、口縁ナデ、頸部縹状紋	ミガキ	46	出川西II 検	
67	検	甕		(13.0)	口縁1/8	口唇キザミ、口縁ナデ、頸部縹状紋、胴部波状紋	ミガキ摩滅	42	出川西II 検	
68	検	甕		(9.6)	口縁1/6	口唇縹紋摩滅、頸・胴部縹紋LR横	横～斜ミガキ	28	出川西II 棟SB	
69	検	甕		(20.8)	口縁1/10	口唇縹紋LR、口縁ナデ、頸部縹状紋	ミガキ摩滅	57	出川西II	外面炭化物付着
70	検	甕			頸部1/4	胴部ハケメ後笠沈線による複合鋸齒紋・円形浮紋・斜線紋	ミガキ	41	出川西II 検	
71	検	台付甕		(7.8)	底部2/3	胴部板ナデ摩滅、脚部縦ハケメ	胴部縦ハケズリ状の板ナデ・ナデ	73	出川西II 検	
72	検	鉢		(7.6)	口縁1/8	口縁ヨコナデ、体部ミガキ摩滅	ミガキ	29	出川西II 検	2孔穿孔
73	区域外	壺		9.6	底部完	摩滅	摩滅	74	出川西II 区域外	
74	区域外	台付甕		(6.4)	底部3/8	脚部ナデ後ミガキ、端面面取り	胴部摩滅不明、脚部ハケメ後一部ミガキ	44	出川西II 区域外NE	
75	検	甕		(16.6)	口縁1/8	口唇ヨコナデ、体部縦ミガキ摩滅	横ハケメ後ミガキ	45	出川西II 検	古墳中期の杯

第4表 出川西遺跡Ⅱ出土石器実測図掲載個体属性一覧

No.	出土遺構1	出土遺構2	器種	形態	素材	素材獲得技術	二次加工技術	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	礫面	石材名	母岩
1	6住	No.11	磨製礫形石器	—	剥片	通常	両極	48.8	18.2	3.3	3.9	背小	千枚岩	単独
3	6住	No.17	打製斧形石器	短冊	不明	不明	両極	78.5	35.6	11.2	33.2	背・腹	ホルンフェルス	単独
5	6住	北東奥	礫形石器	有茎	礫	礫	押圧	29.0	9.8	5.0	1.1	背・腹	黒耀石	単独
15	6住	北東奥	磨製礫形石器	—	剥片	通常	通常・両極・研磨	66.3	31.4	6.5	17.2	なし	千枚岩	単独
16	6住	北東奥	磨製礫形石器	—	剥片	通常	両極・研磨	66.4	25.3	6.7	14.2	背中	千枚岩	105
17	6住	北東奥	磨製礫形石器	—	不明	不明	研磨・穿孔	23.3	11.2	1.9	0.7	なし	結晶片岩	102
24	6住	北東	二次加工ある剥片	単単	剥片	通常	通常・両極	35.5	45.0	7.7	13.2	背大	ホルンフェルス	単独
39	6住	北東	磨製包丁形石器	単単	剥片	通常	研磨・敲打	50.2	32.7	7.2	15.2	背中	粘板岩	単独
47	6住	南西	二次加工ある剥片	単単	楔状剥片	両極	両極	68.9	32.8	5.9	17.8	背大	千枚岩	単独
63	6住	ベルト北	礫形石器	有脚	不明	不明	押圧	18.4	11.4	3.2	0.5	なし	黒耀石	単独
67	6住	ベルト東	礫形石器	平基	不明	不明	押圧	19.4	18.4	7.5	2.2	背小	黒耀石	単独
71	6住	ベルト西	有孔石製品	—	不明	不明	研磨・穿孔	19.9	18.8	5.7	4.1	なし	泥質凝灰岩	101
81	6住	北東奥	礫石器Ⅰ類	—	棒状礫	礫	敲打	143.2	80.4	55.2	820.0	ほぼ全面	礫質砂岩	単独
82	6住	北東奥	錘状石器	—	板状礫	礫	敲打	103.1	78.2	22.0	250.0	ほぼ全面	砂岩	単独
101	土坑3	覆土	有孔石製品	—	不明	不明	研磨・敲打・穿孔	21.3	19.2	5.3	4.9	なし	泥質凝灰岩	71
102	土坑3	覆土	磨製礫形石器	—	不明	不明	研磨・穿孔	32.3	18.4	2.4	1.8	なし	結晶片岩	17
105	検出面	6住付近	磨製礫形石器	—	剥片	通常	通常・両極	64.9	29.3	6.5	12.8	なし	千枚岩	16
106	検出面	6住付近	磨製礫形石器	—	不明	不明	両極・敲打・研磨	35.3	22.9	4.7	4.6	なし	粘板岩	単独

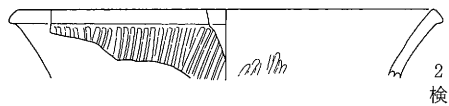
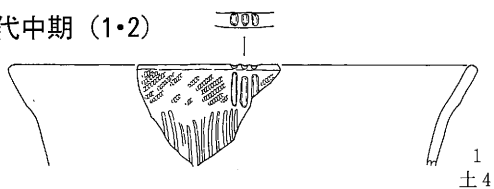
第5表 出川西遺跡Ⅱ出土石器器種単位石材組成

器種/石材	黒耀石		チャート		珪質泥岩		粘板岩		凝灰岩		泥質凝灰岩		千枚岩		結晶片岩		ホルンフェルス		砂岩		礫質砂岩		珪岩		石材		
	Ob	Ch	SiMu	SI	Tu	MTu	Ph	CrSc	Ho	Sa	CoSa	Qu	略号/計														
石核	C	6							1																		
剥片	F	8	3	1								2			2												16
楔状石核	BC	10											1														11
楔状剥片	BF	4																									4
礫形石器	FP	3																									3
錐形石器	Dr	1																									1
スクレイパー状石器	Sc	1																									1
二次加工ある剥片	RF	9	2									2			1												14
微細剥離痕ある剥片	MF	16	5																								21
打製斧形石器	FA																	1									1
磨製礫形石器	PP						1					5			2												8
磨製包丁形石器	PK						1																				1
礫石器Ⅰ類	PI																			3		1					4
礫石器Ⅲ類	PⅢ																					1					1
礫石器複合	PC																				1	1					2
錘状石器	KW																				2						2
礫	P		4																		6	5		1			16
礫片	PT								3												2	1					6
有孔石製品	Bo											2									2	1					2
器種	略号/計	68	14	1	5	1	5	1	2	9	3	5	14	9	1	122											

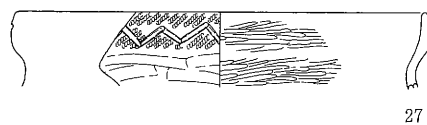
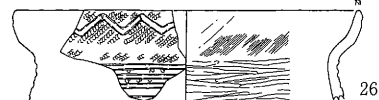
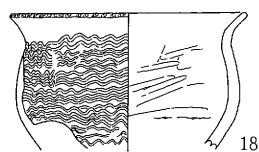
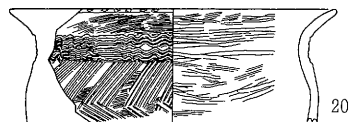
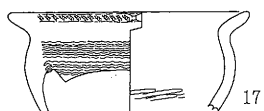
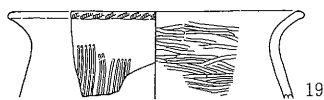
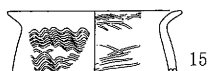
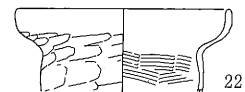
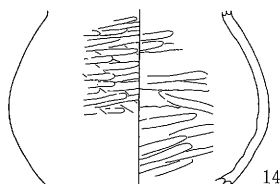
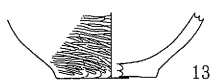
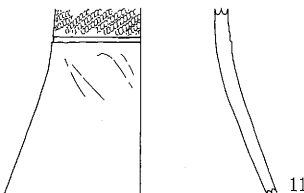
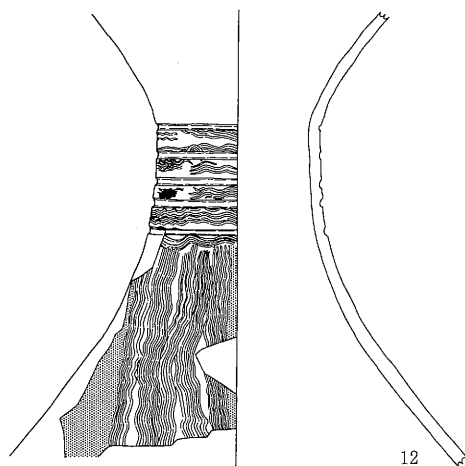
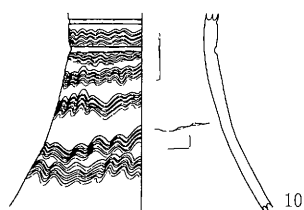
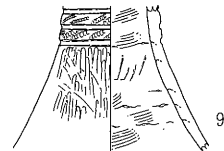
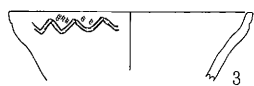
第6表 出川西遺跡Ⅱ出土石器遺構・石材単位器種組成

出土遺構1	石材/器種	C	F	BC	BF	FP	Dr	Sc	RF	MF	FA	PP	PK	PI	PⅢ	PC	P	PT	Bo	KW	計	器種/石材	出土遺構1	
6住	Ob	3	7	7	3	3	1		5	12											41	Ob	6住	
	Ch		3						1	4									4			12		Ch
	SiMu		1																			1		SiMu
	SI												1									4		SI
	Tu	1																				1		Tu
	MTu																			1		1		MTu
	Ph		1						2				3									6		Ph
	CrSc												1									1		CrSc
	Ho	1	2						1		1											5		Ho
	Sa														3	1	6	2			2	14		Sa
CoSa														1	1	1	5	1			9	CoSa		
Qu																	1				1	Qu		
6住 計		5	14	7	3	3	1	0	9	16	1	4	1	4	1	2	16	6	1	2	96		6住 計	
土坑3	Ch								1												1	Ch	土坑3	
	MTu																				1	MTu		
	Ph		1																		1	Ph		
	CrSc												1								1	CrSc		
土坑3 計		0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	4		土坑3 計	
土坑4	Ph												1								1	Ph	土坑4	
	CrSc			1																	1	CrSc		
土坑4 計		0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2		土坑4 計	
検出面	Ob	3	1	3	1				3	4											15	Ob	検出面	
	Ch									1											1	Ch		
	SI											1									1	SI		
	Ph											1									1	Ph		
検出面 計		3	1	3	1	0	0	0	3	5	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	18		検出面 計	
調査区域外	Ob							1	1												2	Ob	調査区域外	
調査区域外 計		0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2		調査区域外 計	
総計		8	16	11	4	3	1	1	14	21	1	8	1	4	1	2	16	6	2	2	122		総計	
出土遺構1	石材/器種	C	F	BC	BF	FP	Dr	Sc	RF	MF	FA	PP	PK	PI	PⅢ	PC	P	PT	Bo	KW	計	器種/石材	出土遺構1	

弥生時代中期 (1・2)

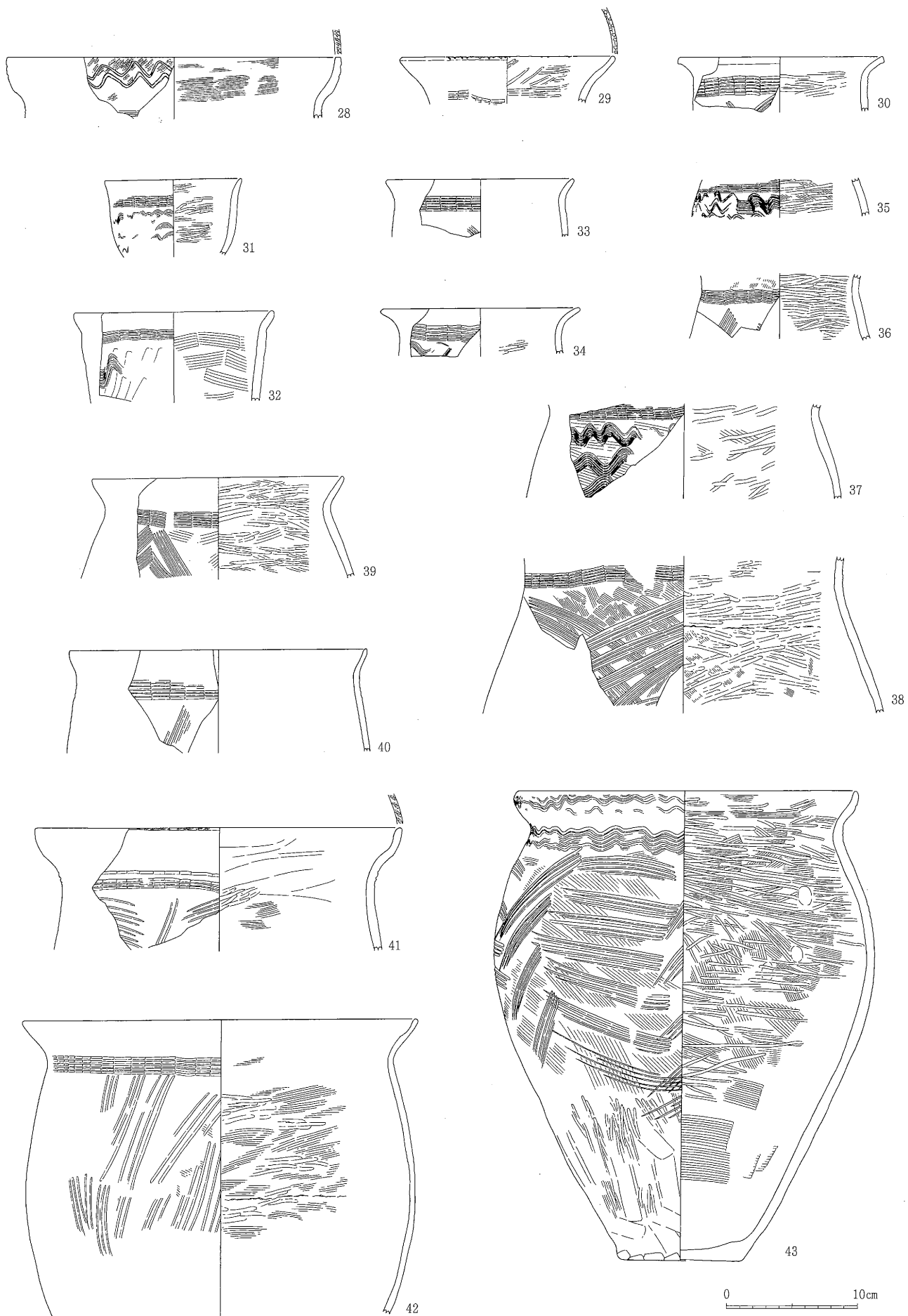


第6号住居址 (3~64)

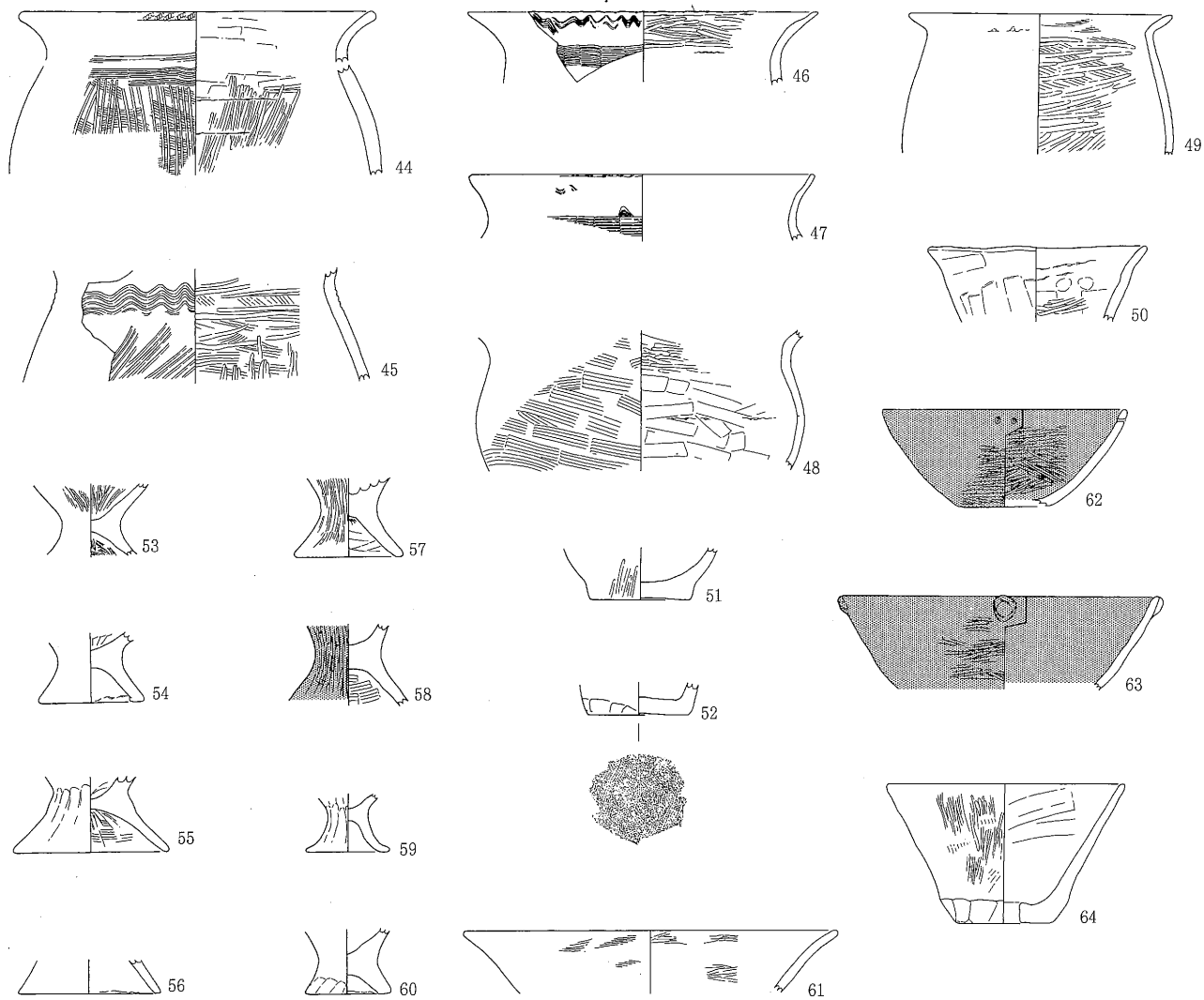


0 10cm

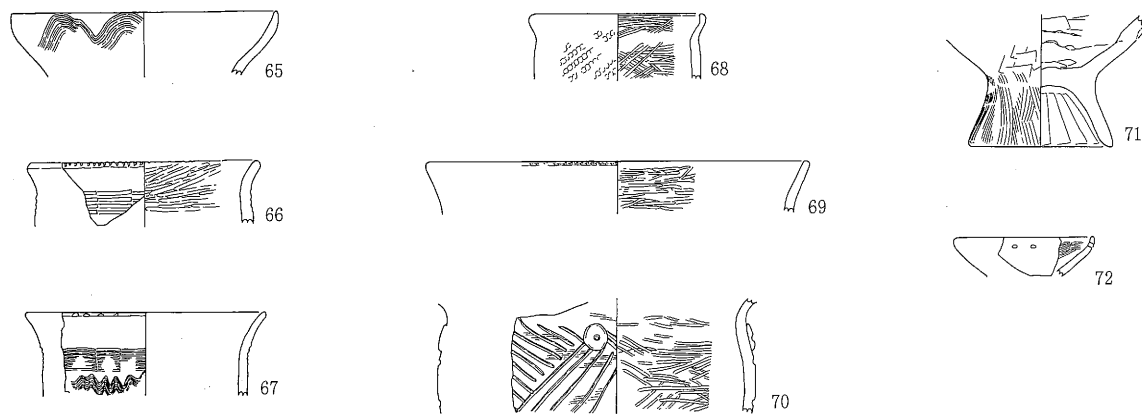
第16图 出川西遺跡II出土土器 (1)



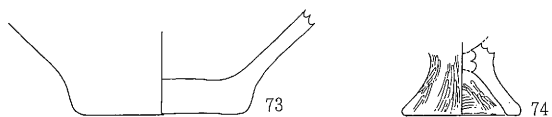
第17図 出川西遺跡Ⅱ出土土器(2)



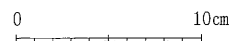
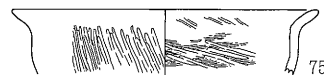
検出面 (65~72)



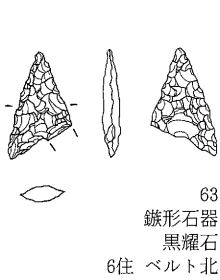
区域外 (73・74)



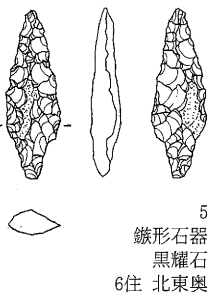
古墳時代中期 (75)



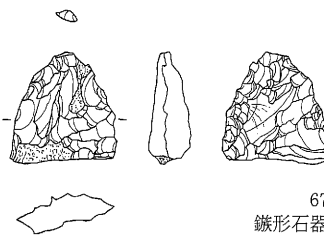
第18図 出川西遺跡II出土土器 (3)



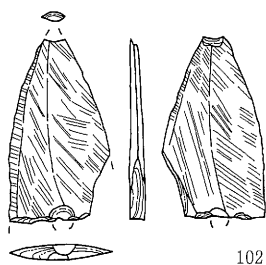
63
 鏃形石器
 黒耀石
 6住 ベルト北



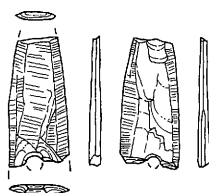
5
 鏃形石器
 黒耀石
 6住 北東奥



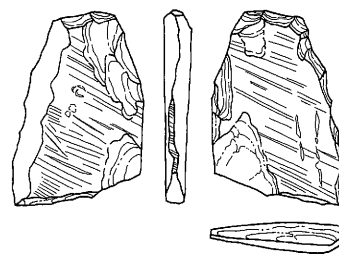
67
 鏃形石器
 黒耀石
 6住 ベルト東



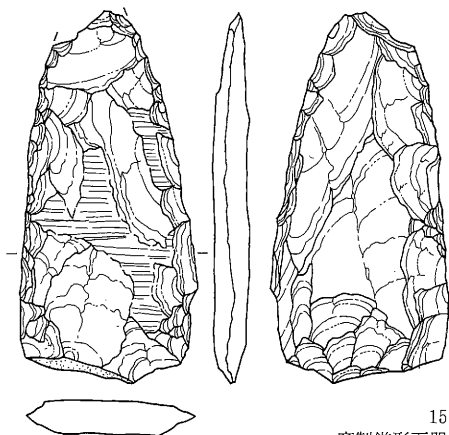
102
 磨製鏃形石器
 結晶片岩
 土坑3 覆土



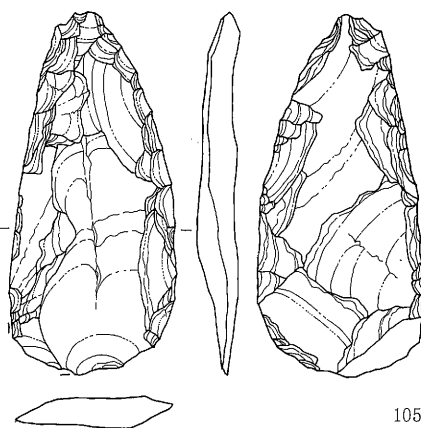
17
 磨製鏃形石器
 結晶片岩
 6住 北東奥



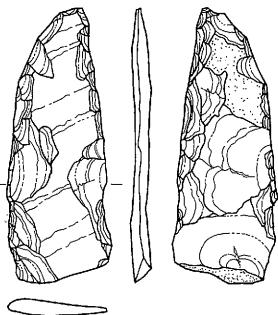
106
 磨製鏃形石器
 粘板岩
 検出面 6住付近



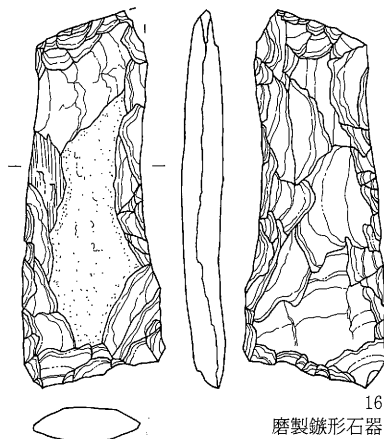
15
 磨製鏃形石器
 千枚岩
 6住 北東奥



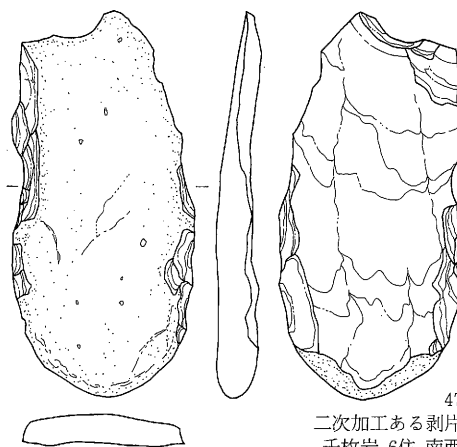
105
 磨製鏃形石器
 千枚岩
 検出面 6住付近



1
 磨製鏃形石器
 千枚岩
 6住 No.11



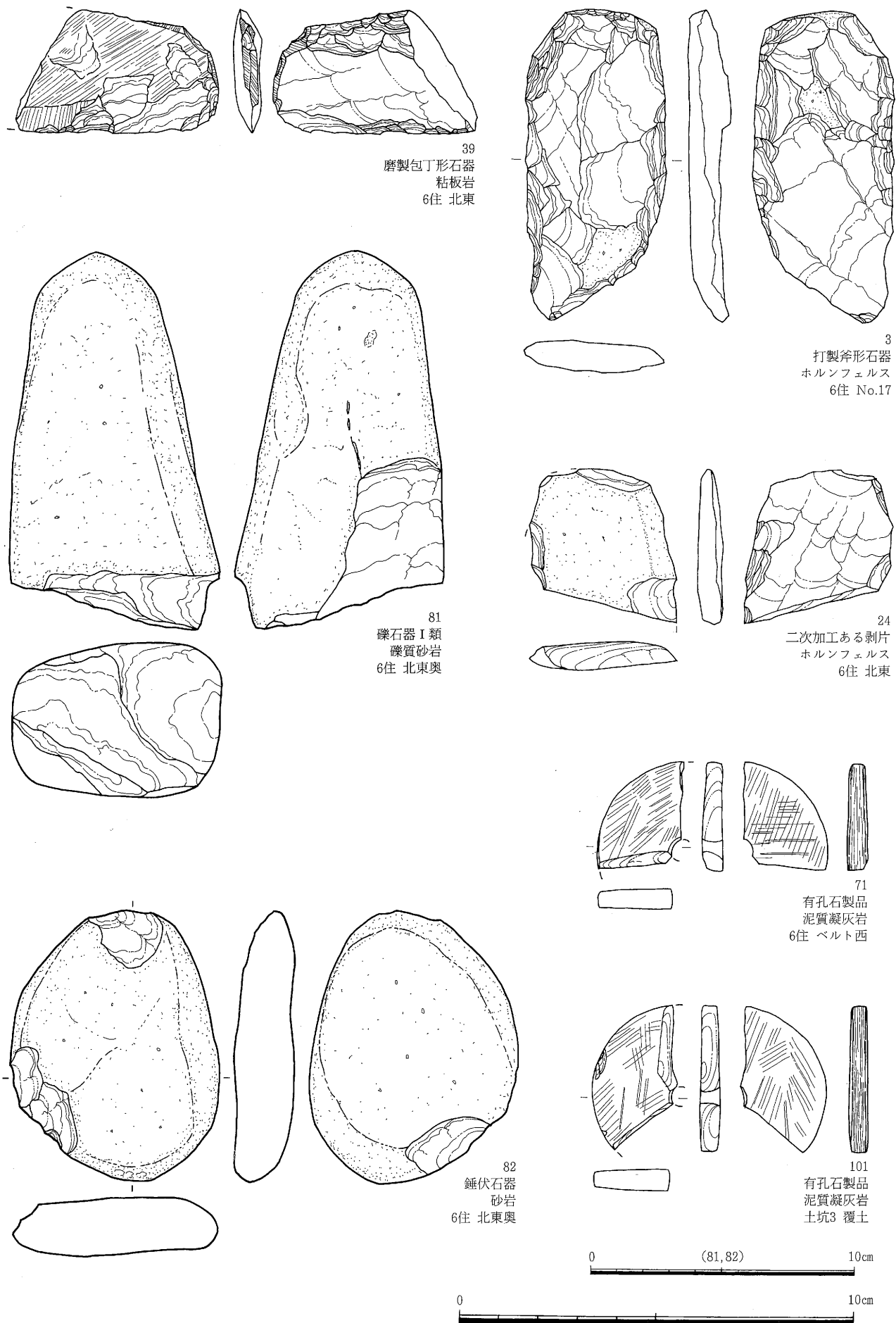
16
 磨製鏃形石器
 千枚岩 6住 北東奥



47
 二次加工ある剥片
 千枚岩 6住 南西



第19図 出川西遺跡II出土石器 (1)



第20図 出川西遺跡II出土石器(2)

圖 版



出川西遺跡Ⅱ全景（南から）



同上、調査区南半部の状況（上が南）



調査区近景（左下：土器集中9 右上：土器集中3）



調査区北部の状況（凹地状地形、南から）



配石 1 蓋石除去前の状況（北西から）



同上、蓋石除去後の状況（北西から）



配石 2 検出状況 (東から)



同上、蓋石除去前の状況 (東から)



配石 2 蓋石除去後の状況（南から）



配石 3 完掘状況（南から）



配石 4 蓋石除去前の状況（西から）



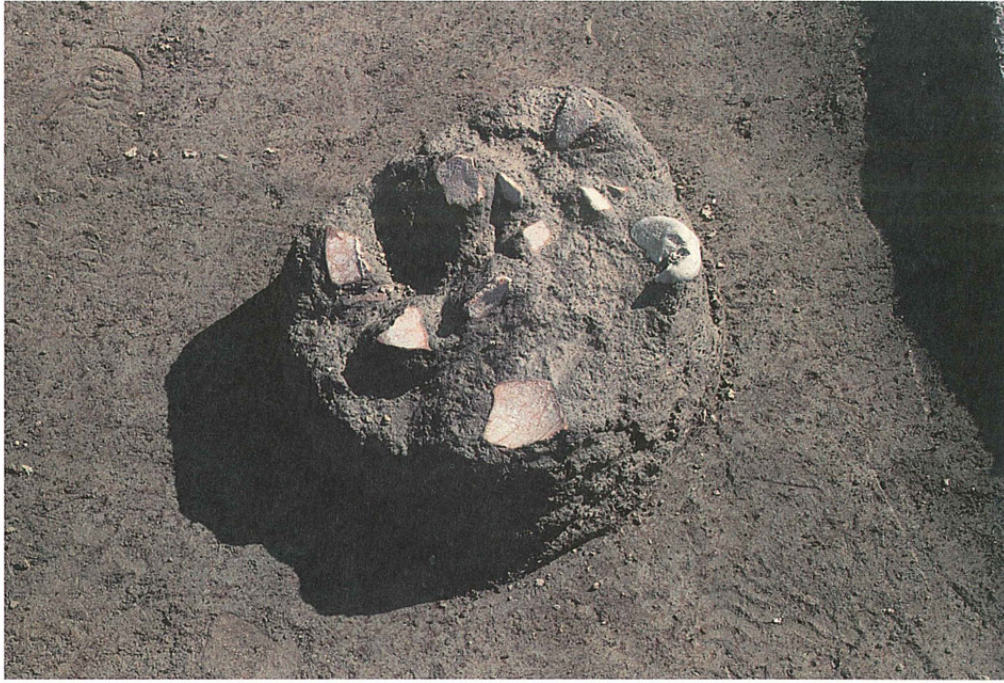
同上、蓋石除去後の状況（東から）



配石 4 鉄鎌出土状況（北から）



配石 5 完掘状況（東から）



土器集中1 (北から)



土器集中2 (西から)



土器集中3 (西から)

土器集中9 全景 (南から)



同上、埴出土状況
(南西から)

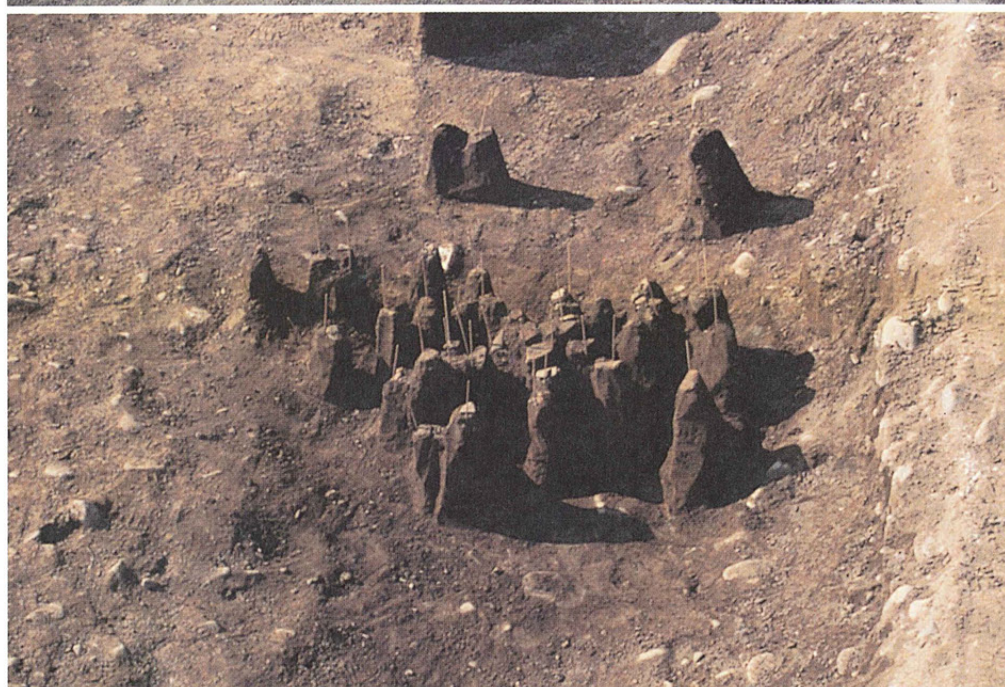


同上、高杯出土状況
(北から)





土器集中10壺出土状況

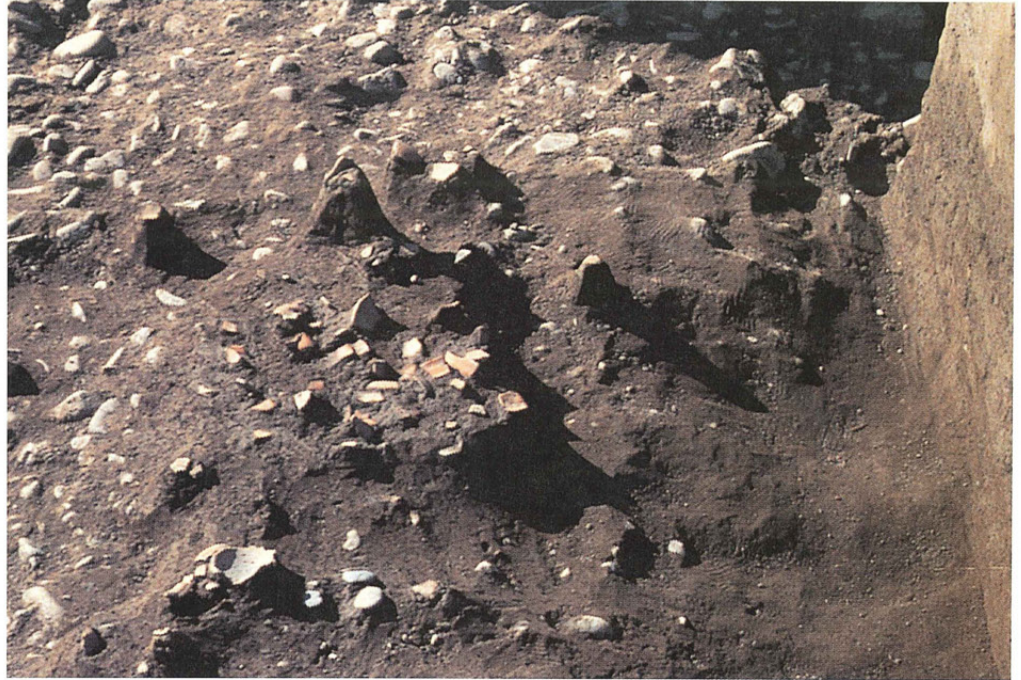


土器集中11 (東から)



土器集中12 (北から)

土器集中13 (東から)



土器集中14杯出土
(東から)

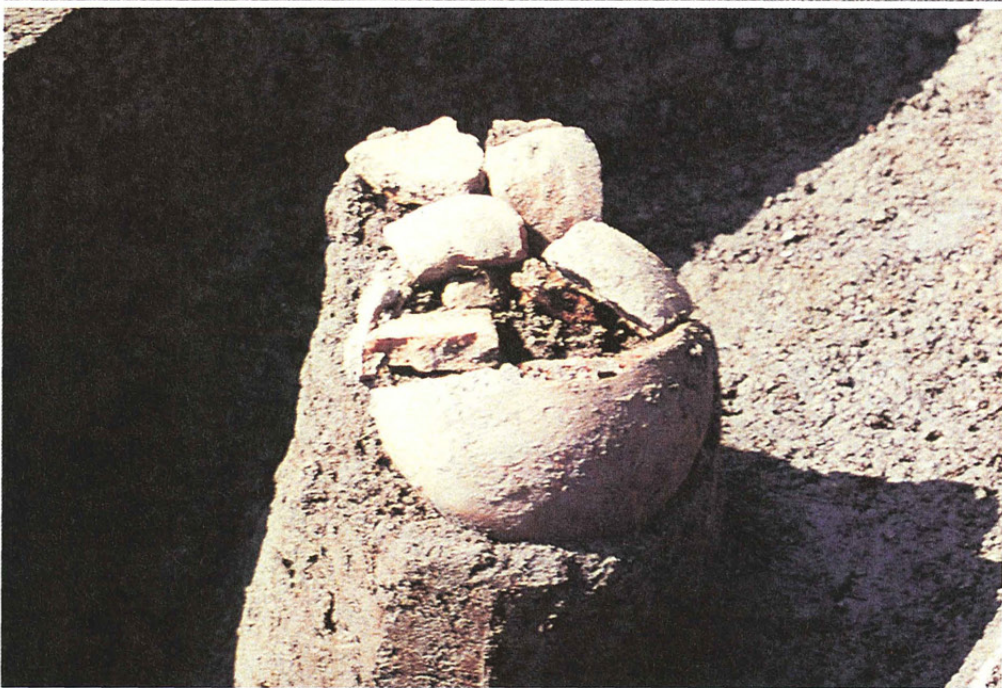


土器集中15 (北から)





土器集中16埴出土状況
(西から)



土器集中17無頸壺出土状況



土器集中18壺出土状況
(東から)

火葬墓（東から）

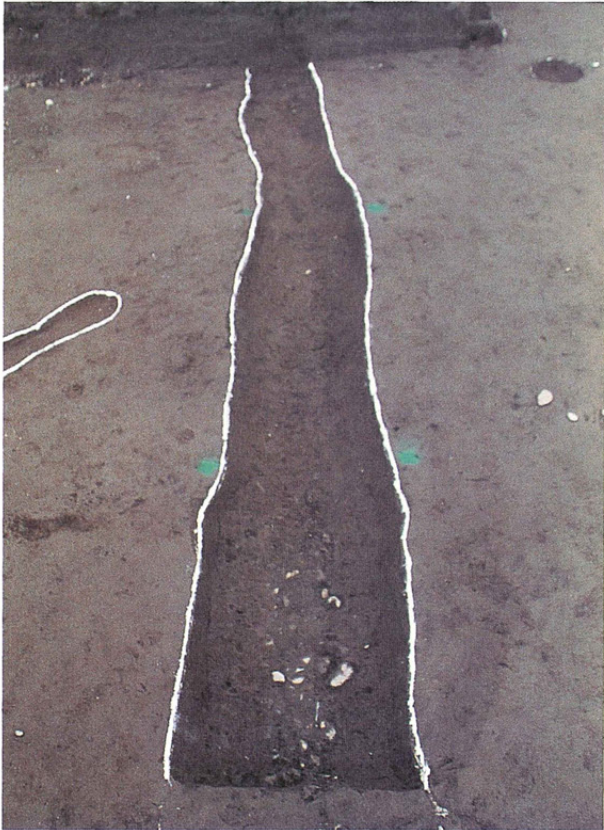


溝状遺構11・12（西から）

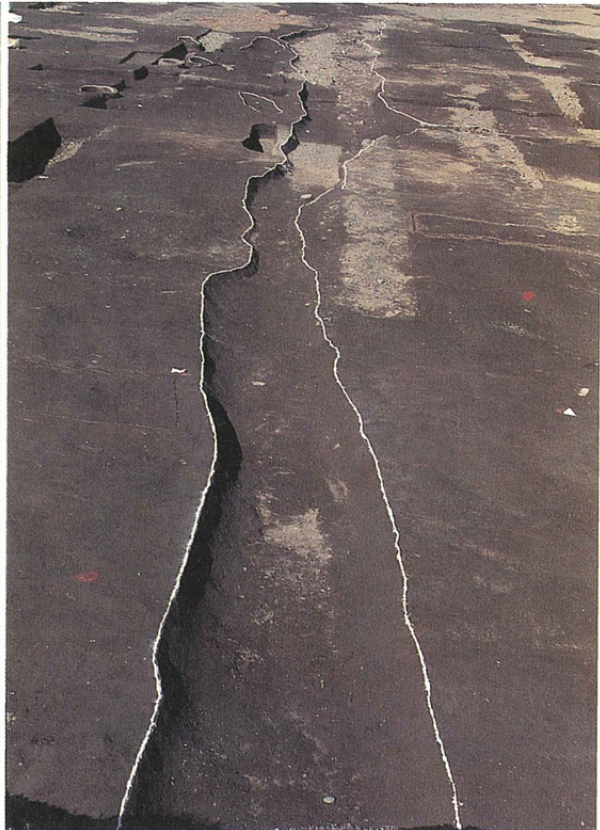


溝状遺構15・16（西から）





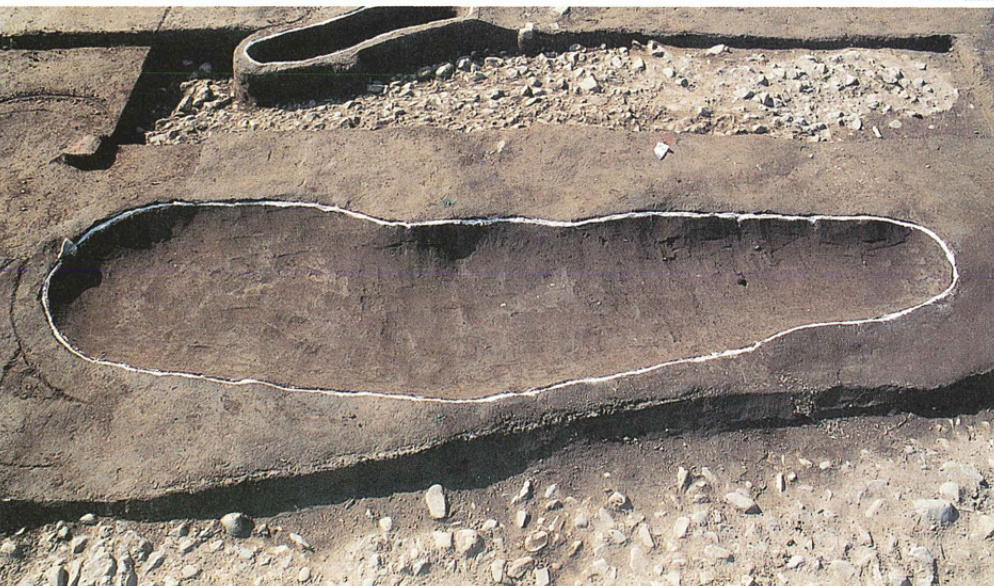
溝状遺構8 (西から)



溝状遺構17 (南から)



溝状遺構19 (東から)



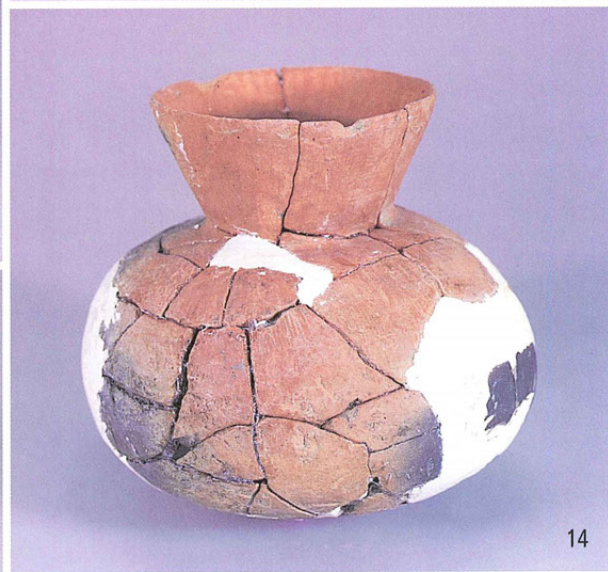
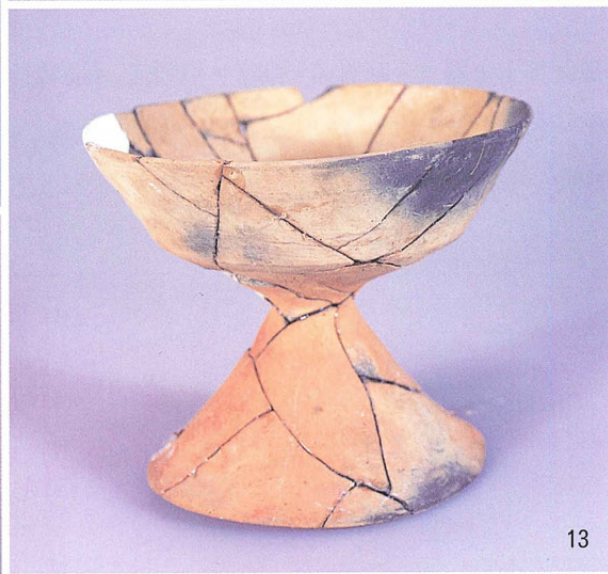
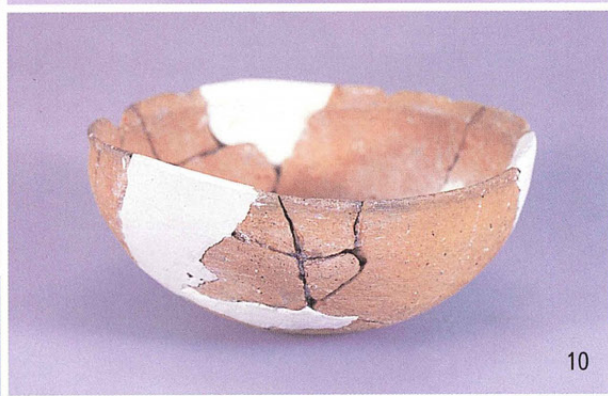
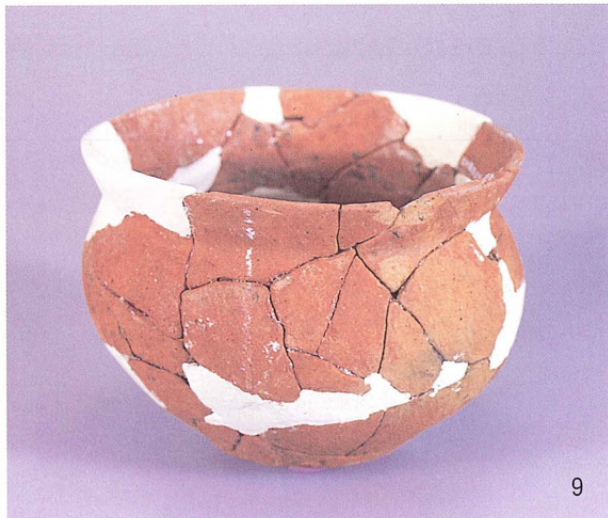
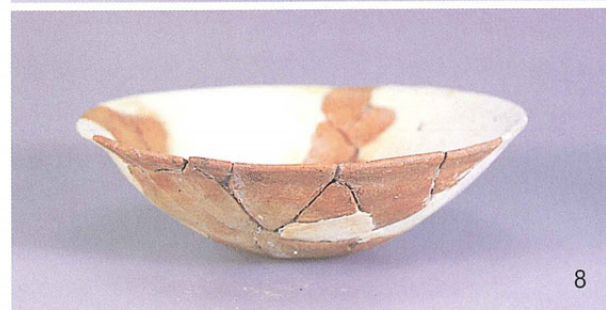
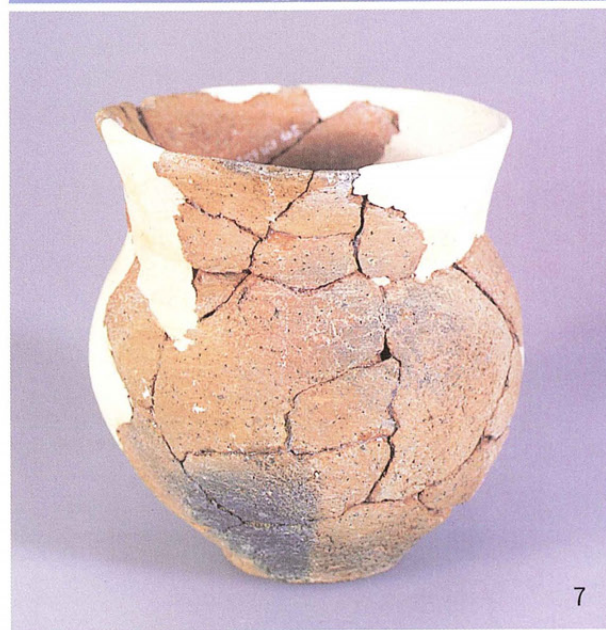
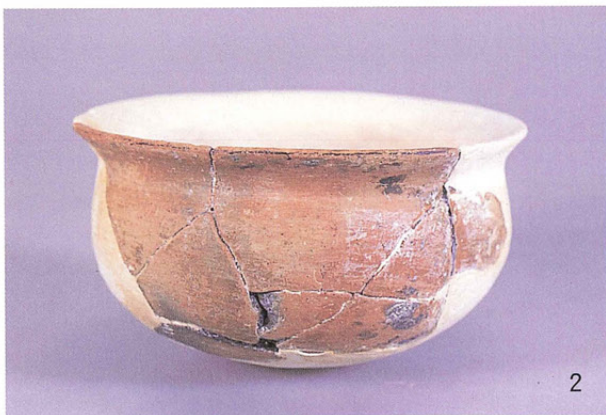
溝状遺構20 (東から)



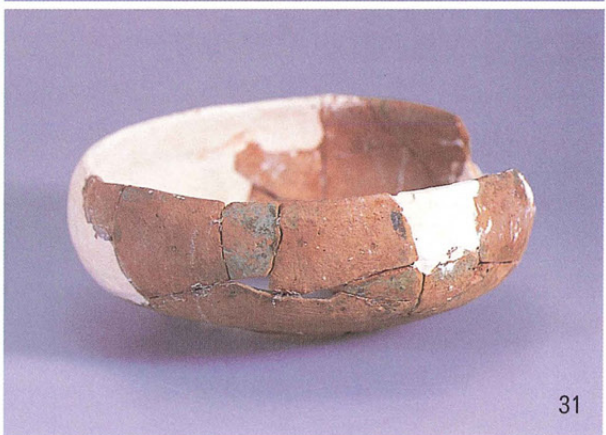
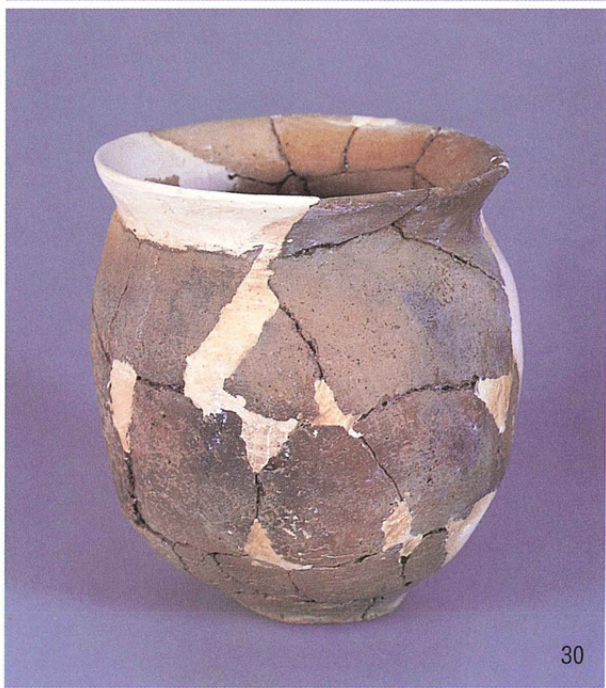
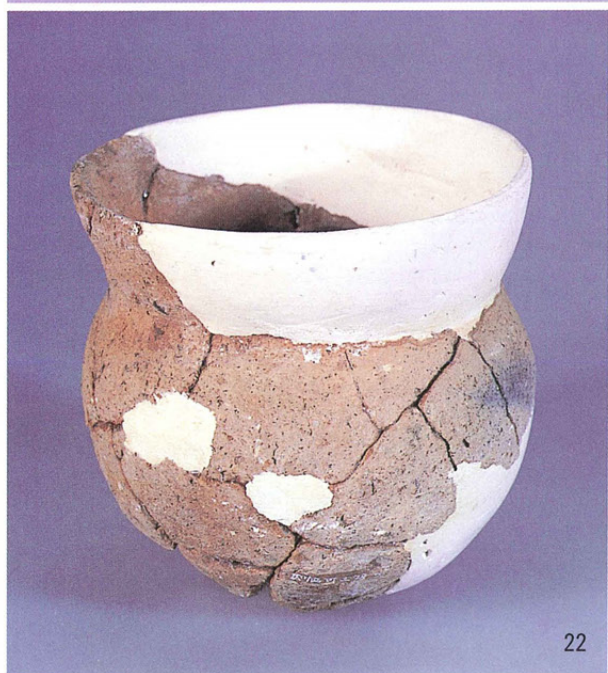
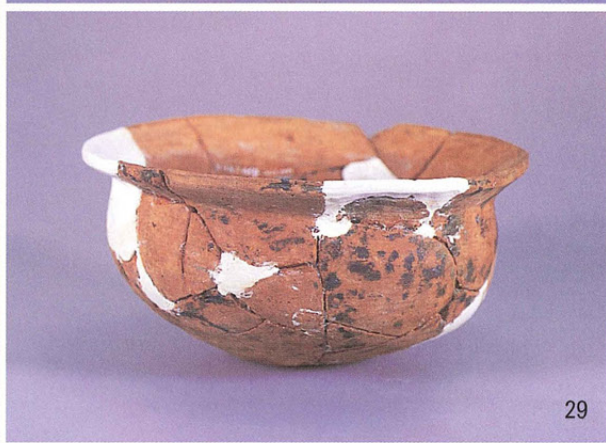
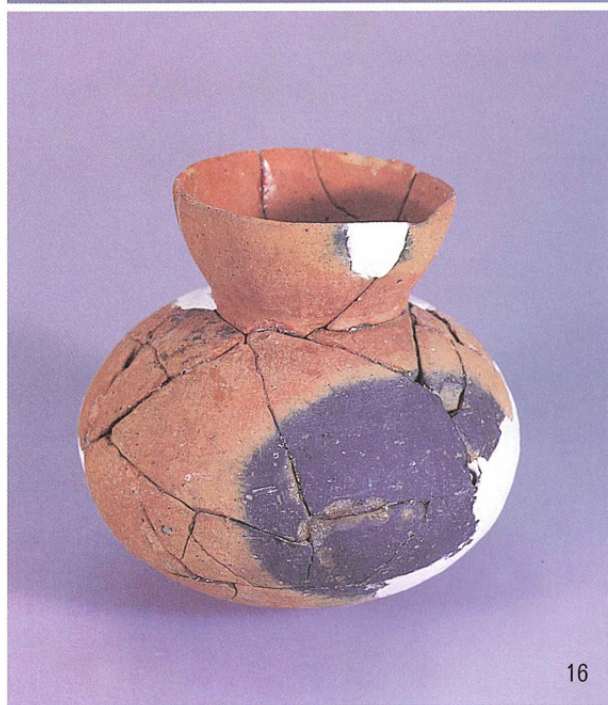
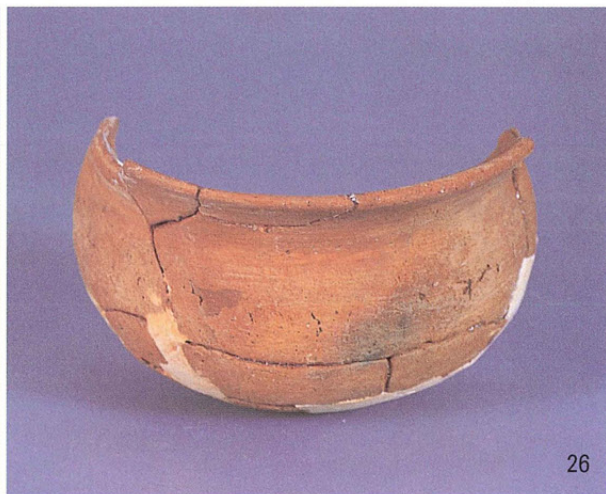
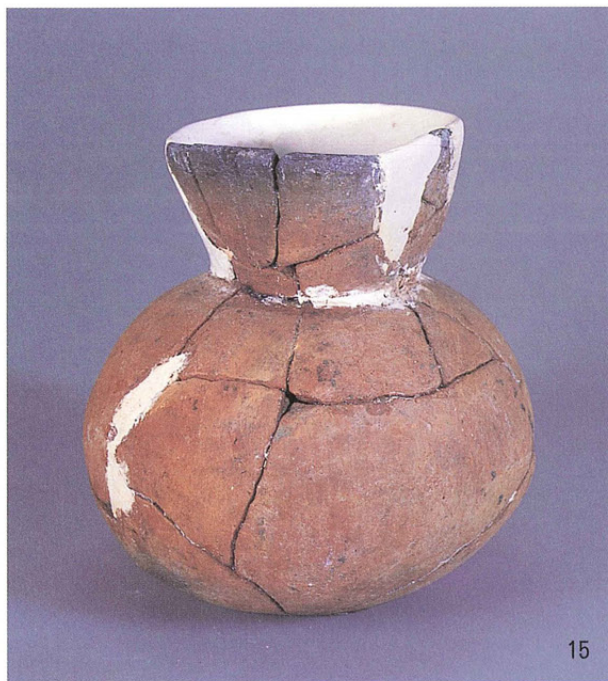
出川西遺跡出土土器（土師器杯・高杯・無頸壺、須恵器杯）

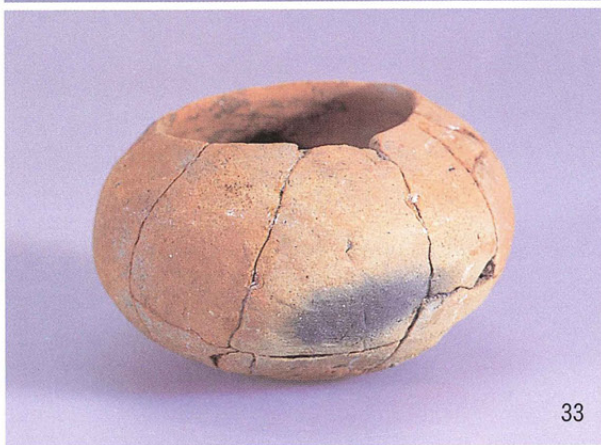
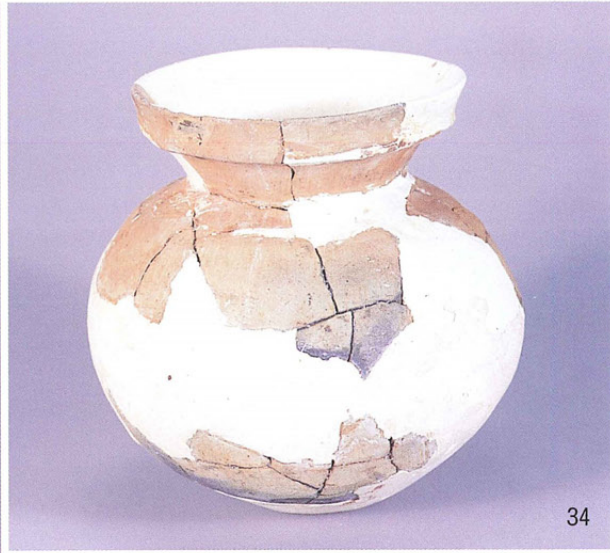
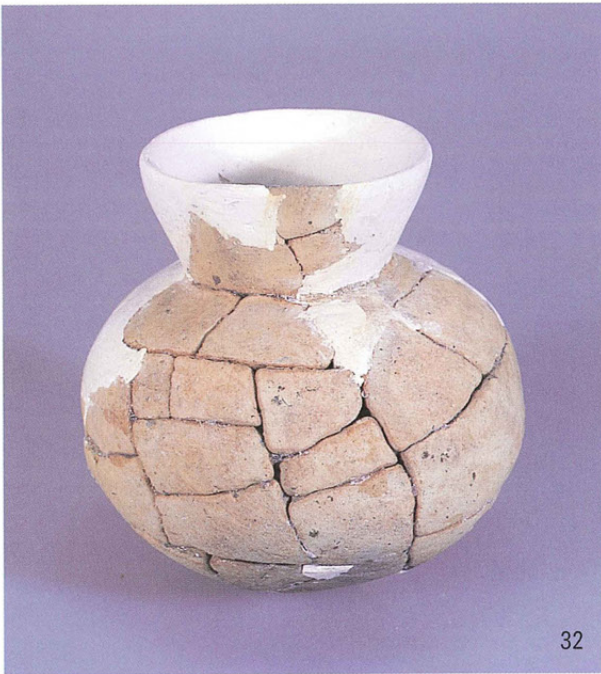


同上（土師器埴・壺類）



出土土器 (2)



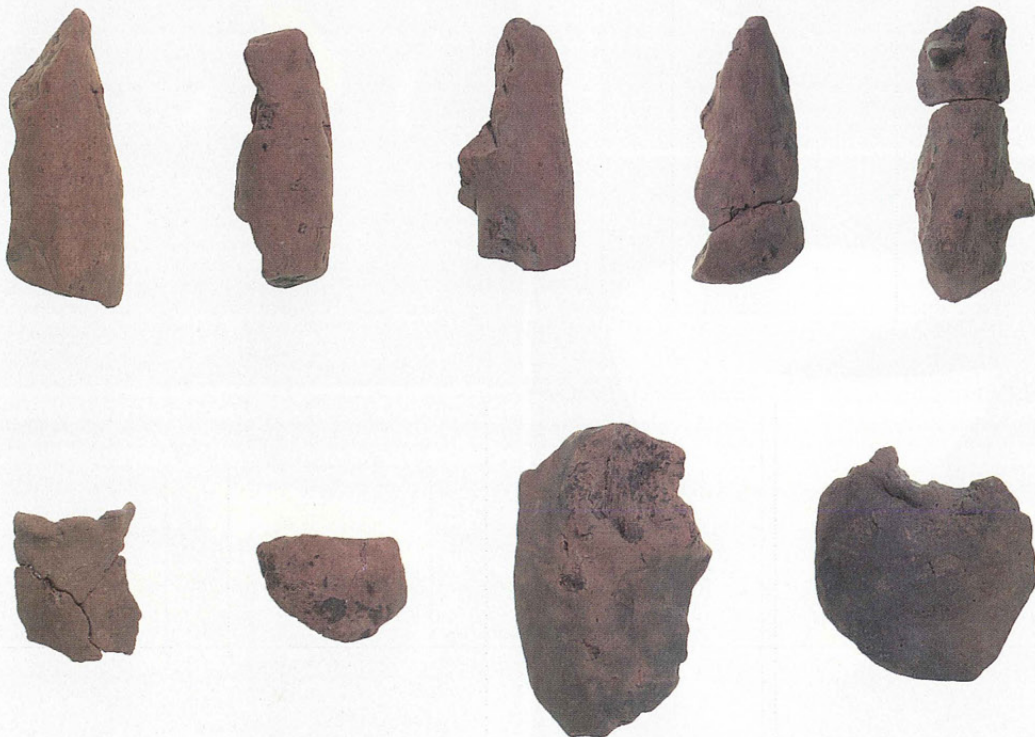


土製品 (S=)

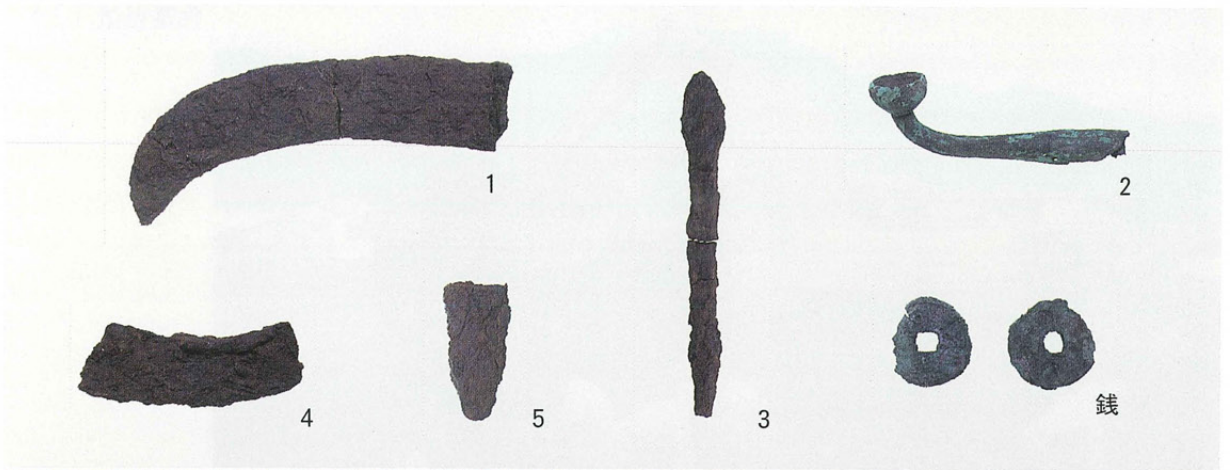
上段：棒状

下段左 2 点：器物

下段右 2 点：剥離



金属製品
(S=1/2)



出川西遺跡Ⅱ
遺構

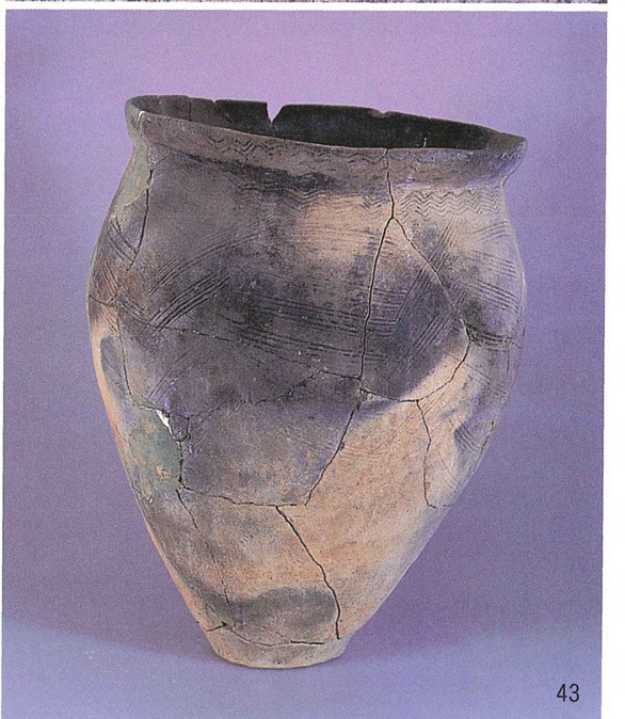
左上：全景
左下：遺物
右上：甕出土
右下：同上



出川西遺跡Ⅱ
出土土器



12



43

作業風景（1）



同上（2）



調査団一同



出川西遺跡VI緊急発掘調査報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとしいでがわにしいせききんきゅうはくつちょうさほうこくしょ							
書名	長野県松本市出川西遺跡VI緊急発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No.135							
編著者名	竹原 学・直井雅尚・太田圭郁							
編集機関	松本市教育委員会							
所在地	〒390-0873 長野県松本市丸の内3番7号 (記録・資料保管：松本市立考古博物館・〒390-0823 松本市中山3738-1・TEL 0263-86-4710)							
発行年月日	平成11(1999)年3月26日(平成10年度)							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いでがわにし 出川西	ながのけん 長野県 まつもと 松本市 たかみやなか 高宮中 ふたば 双葉	20202	176	36度 12分 35秒	137度 57分 50秒	19960909～ 19961114	6,120	南松本ショッピングプラザ建設にともなう緊急発掘調査。
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
出川西	散布地	古墳	配石遺構 土器集中地点	7基 19カ所	土器(土師器・須恵器) 土製品 鉄製品(鎌・鏃他)	古墳時代中期の特異な配石遺構、土器集中地点を検出、当該期における居住域の周辺部の様相を窺い知ることができた。		
		中世以降	火葬墓 溝状遺構	1基 15条	陶器・銅製品			

松本市文化財調査報告 No.135

長野県松本市

出川西遺跡VI

— 緊急発掘調査報告書 —

発行日 平成11年3月26日

発行者 松本市教育委員会

〒390-0873

長野県松本市丸の内3番7号

印刷 株式会社 プラルト

木下...
...

出...
...

木下...
...